

F D ・ S D 活 動 報 告 書

平成 29 年度

羽 陽 学 園 短 期 大 学

平成 29 年度 F D ・ S D 活動報告書

目次

平成 29 年度	羽陽学園短期大学の F D 関連事業について	1
平成 29 年度	F D ・ S D 推進事業計画	2
平成 29 年度	F D ・ S D 懇談会記録	6
平成 29 年度	学内 F D ・ S D ワークショップ	16
平成 29 年度	後期学内公開授業・授業検討会	18
第 9 回	大学間連携 S D 研修会	22
第 17 回	山形大学 F D 合宿セミナー	24
平成 29 年度	全国保育士養成協議会 東北ブロックセミナー 仙台大会	27
平成 29 年度	第 23 回 F D フォーラム	41
平成 29 年度	教員個人目標に対する自己評価	55
平成 29 年度	卒業時満足度調査	70
平成 29 年度	学習成果アンケート (1 年次・2 年次・専攻科)	73
平成 29 年度	授業改善アンケート (前・後期)	79

平成 29 年度の羽陽学園短期大学の FD・SD 関連事業について

FD・SD 推進委員会委員長 樋口 健介

FD 委員会は、本年度から名称を FD・SD 推進委員会と改めた。教員組織としてのファカルティ (Faculty) だけでなく、全教職員としてのスタッフ (Staff) の能力開発という委員会の役割を明確にするためである。教員のみに関わる内容だけでなく、職員を対象とした内容を増やし、短大全体の質の向上に繋がる取り組みを目指した。

定例 FD・SD 懇談会では、参加する職員を昨年度から 1 名増やし、3 名とした。学生を交えての懇談会を今年度は 4 回行い、新たに一年次学生を交えて話す機会を設けた。一年次との懇談会では半年の学校生活を過ごしてみた感想を聞きながら、授業について意見交換をした。教員が話し続ける授業、DVD 教材を使った授業、演習の行い方などに対して、学生の素直な考えを聞くことができ授業改善へ活かせる場となった。また、6 月には本学が広報関連を委託している業者の方を 2 名招いて、本学の広報の進め方について議論した。教職員や関連業者、学生を交えて本学の魅力について、改めて考えなおすことができた。今後もできる限り、多様な人が参加しやすい場として継続することで本学の教育、運営の改善策が見つかるのではないだろうか。

本年度の学内 FD・SD ワークショップはリクルートマーケティングパートナーズ (株) から外部講師を招聘して、開催した。テーマを「学外から見る羽陽短大 ～うよたんのウリを考える～」と設定した。民間の視点で短大を見直す機会がほとんどなかったため、非常に新鮮な学びとなったという感想が多く聞かれた。全教職員参加のもと、短大の将来を考える機会となった。ワークショップを活かした学生募集の具体的な方策は大学改革推進センター (入試企画部門) と連携して実践していければと考えている。

公開授業については、前期に公開授業週間を設け、後期に特定の教員の公開授業と授業検討会を設けた。専任教員はすべての教員が参加しているが、非常勤講師の先生が参加できる取り組みにすることが今後の課題である。

学生 FD については“つばさ”プロジェクトが終わったこともあり、特に学生が他大学の学生と交流する機会が作れなかったことが残念である。来年度以降は、学生 FD の予算を増額し、可能な限り学生が外部に出て活動できる機会を提供できればと考える。

今後、短大の運営が難しくなっていく中で、より一層、教職員間の連携、情報共有が欠かせなくなる。FD・SD を的確に推進することは決して近道ではないが、困難な道のりの道標となるのではないかと考える。

平成 29 年度 学内 F D ・ S D 推進委員会事業計画

◇ F D 事業内容

(1) 定例 F D ・ S D 懇談会

前年度に引き続き、【別記】の月間目標や懇談会テーマについて各自の取り組みを検証し、意見交換を行う。学生 F D 推進のため、定例 F D ・ S D 懇談会への学生の参加については継続していく。昼食会形式は継続し、金額を抑え、各教員の負担を少なくする。学生分は学校が負担する。

新たに事務職員目線の懇談会テーマを設定し、教職員がお互いの業務を共有できる場にする。ゲストを招く。

(2) 公開授業—授業検討会

公開授業週間については、前期に特定の教員の公開授業、後期に公開授業週間を設ける。特定の教員の公開授業については、授業検討会とセットで進める。

今年度も引き続き、非常勤講師の先生方にも参加を呼び掛ける。

(3) F D 個人目標—自己評価

前年度の自己評価を踏まえ、各教員が年度当初に具体的な目標を掲げ、年度末にその自己評価を行う。

目標と自己評価は掲示と F D 報告書へ記載し、公表する。

(4) 授業評価

すべての授業で行う。専任、非常勤ともに“つばさ”フォーマットの授業評価アンケートを用いる。足りない部分は各教員でオプションの設問を利用する。

授業評価の結果をどのように活用するかが課題として挙がっている。

(5) 卒業時満足度調査

今年度も実施する。教授会で報告し担当部署には学生の不満を検討してもらう。

事務では学生ホールへのポットの設置などできる範囲で、不満へ対応している。

(6) F D ・ S D 活動報告書の作成

内容を精査の上、記載事項の取捨選択を行い、紙面のさらなる充実を図る。

(7) 学外企画への参加依頼/相談

学外の F D ・ S D 企画、研修などには可能な限り意欲的に参加し、情報収集に努める。教職員の大学運営への参加意識を高める。

(8) F D ネットワーク“つばさ”との連絡

昨年度、伝達ミスで F D ワークショップに申し込みなかったことがあった。早めにスケジュールを確認し、参加者を募りたい。

大地連携ワークショップは昨年度で終了したが、学生が参加できる事業については、早期に呼びかけ学生の興味を喚起したい。他大学の学生との交流を通して、広い価値観を持った学生を育成する。

(9) 新規事業の企画案・学内ワークショップの企画案

・教員懇談会、学内ワークショップで「授業評価、学習成果等アンケートの結果」をテーマにする。

・教員懇談会、学内ワークショップへの学生参加。

・FD・SDの取り組みに詳しい講師を招聘する。

・ルーブリックについて、勉強会を実施する。

・基礎教養入門、新入生支援講座、カリキュラムについての見直す機会を作る。

・土日祝日授業を一般開放する。高校生に開放する。(ウィークエンド キャンパス ビジット)

・平成29年度全国保育士養成協議会東北ブロックセミナー仙台大会へ積極的に参加する。

・幼稚園教育要領の改訂について、勉強会をする。

(10) 学生FDについて

教員懇談会等への参加を含め、学生とともに羽陽短大の教育を作りあげていく意識を浸透させる。

学外FDワークショップなどに参加できた学生がいれば、他学生に経験を伝えられる場を設けたい。

【別記】

○FD・SD年間目標

根幹的な目標

「学生の学ぶ意欲を駆り立てるような働きかけを行う」

「学生が自らの行動について振り返り、自ら成長できるように働きかける」

「学習に適した授業環境づくりに努める」

○FD・SD月間目標と定例FD・SD懇談会（原則、教授会開催日の12時15分～）進行分担

月間目標や懇談会テーマの観点から自らの教育活動について、具体的に検証し、還元していく。また、教育理念等についても意見交換できる機会にする。（各グループの話し合いの結果の発表は12時45～50分を目処に始める。）

4月 目 標：「教職員側から積極的に学生と挨拶を交わす」

「各教員の年間FD教育目標を設定し、公表する」

テーマ：「平成29年度FD・SD事業計画について」4/27（木）

司会：樋口 記録：白崎

5月 目 標：「学生の活動に積極的に関わり、名前と呼べる新入生を増やす」

テーマ：「学内美化について考える」5/25（木）（学友会参加）

司会：小林 記録：宮地

6月 目 標：「学生が適切な身なりの認識をもつことができるような働きかけを行う」

テーマ：「羽陽短大の広報について考える」6/29（木）

司会：松田知 記録：樋口

（学友会参加、グラウンド印刷：角田さん、坂部印刷：酒井さん 参加）

7月 目 標：「学習環境を整えるために何ができるかを考えよう」

テーマ：「学生募集について考える（SNS活用）」7/27（木）

司会：大関 記録：伊藤

9月 目 標：「年間目標の中間評価と修正を行い、課題を明らかにしよう」

テーマ：「学生の話から、授業の改善を考える」9/28（木）（一年生参加）

司会：柏倉 記録：太田

10月 目 標：「学生とのコミュニケーションで分別ある使い分けができるような支援を行う」

テーマ：「10月の月間目標の反省」10/26（木） 司会：松田水 記録：小林

11月 目 標：「実習体験について学生と話をし、学生の振り返りを支援しよう」

テーマ：「実習報告会を充実させる方法について考える」11/30（木）（専攻科参加）

司会：高橋 記録：花田

- 12月 目 標：「ゼミの活動を振り返ろう」
テーマ：「ゼミ、卒業研究で育てる能力について考える」12/21（木）
司会：白崎 記録：柏倉
- 1月 目 標：「2年間、あるいは1年間の学生の成果を見つけて、褒めよう」
テーマ：「業務の効率を上げる方法を考える」1/25（木）
司会：荒木 記録：松田知
- 2月 目 標：「今年度の自らの教育活動を振り返り、課題を見つける」
「来年度に向けた明確な教育活動の展望を立てる」
テーマ：「2月の月間目標の反省」
「FD・SD年間目標の反省」2/22（木） 司会：大木 記録：高桑

- ※ 弁当注文は懇談会の記録担当が行う。前回の懇談会終了後から、集約も含めて早目に行ってください。
弁当代は注文された方からの実費徴収です。
- ※ 欠席される場合は早めに記録担当へご連絡ください。
- ※ FD・SD懇談会に参加できず、司会、記録が担当できない場合は、他の月と交換してください。

4月 定例FD・SD懇談会記録

日時：平成29年4月27日（木）

場所：本学会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、松田知、松田水、太田、花田、大関、樋口、宮地、伊藤、白崎、石井、諸橋（欠席：小林）

司会：樋口 記録：白崎

月目標：教員側から積極的に学生と挨拶を交わす
各教員の年間FD教育目標を設定し、公開する。

懇談会内容

<グループ1>（荒木、松田知、伊藤、諸橋、白崎）

- ・FD・SDの新規事業案としてFD・SDの取り組みに詳しい講師を招いてはどうか。
- ・ウィークエンド・キャンパスの実施は新しくてよいのではないかな。
- ・6月の専攻科の懇談会参加は時期的に難しい。

<グループ2>（渡邊、高橋寛、花田、樋口）

- ・事業案として、懇談会に事務の人を積極的に参加してもらうのがよいのではないだろうか。
- ・教職員の業務の整理を試みる。
- ・文教から講師を呼ぶ。

<グループ3>（柏倉、高桑、大関、宮地）

- ・事業の効率化を図る。
- ・全保養協のセミナーに参加してみるのも良いのではないかな。
- ・無理のない範囲でキャンパス・ビジットを行ってみるのも良いと思う。

<グループ4>（大木、太田、松田水、石井）

- ・FD・SDの取り組みに詳しい講師を招いての勉強会をする。
- ・事務の活動について教職員間での共有。
- ・ルーブリックについての理解を深める。

<まとめ>

- ・今年度からFD・SD推進委員会になったため、事務職員と業務内容などの共有をさらに図る必要があるように感じた。また、FD・SD活動の発展のために外部講師を招いての勉強会や保育指針の改定に関することを全体で勉強会を行ってみるといった事業を展開してみるのも良いのではないかなと思った。
- ・なお、懇談会を当日に欠席された方については、懇談会の記録係に連絡をするということが決まった。

5月 定例FD・SD懇談会記録

日時：平成29年5月25日（木）

場所：本学会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高桑、松田知、松田水、太田、大関、樋口、伊藤、白崎、高橋明、浦山、塚原（欠席：高橋寛、花田）学友会7名、宮地

司会：小林 記録：宮地

月目標：学生の活動に積極的に関わり、名前と呼べる新入生を増やす
校内美化について考える

懇談会内容

<グループ1>（大木、小林、白崎、宮地、学生1名）

- ・掃除の時間は音楽（短大オリジナルの曲等）を流して、学生に楽しみを持って掃除に取り組んでもらう。
- ・各場所に、掃除用具をそろえることですぐ掃除ができる環境を作ることも大切である。
- ・専攻科を中心にゴミの分別の声がけをしてきたが、専攻科だけではなく他の学年も中心となれるような体制が取れると、さらに学生自身の校内美化に対する自覚が持てるようになるのではないかと。

<グループ2>（松田知、樋口、伊藤、浦山、学生2名）

- ・ゼミ毎掃除をしているため、どこのゼミが一番きれいに掃除をしているか評価し、賞品を贈呈するようなゼミ対抗の掃除対決という取り組みも学生のやる気を起こさせる取り組みとなるのではないかと。
- また、賞品ではなく、クラスアピールの点数が加算されることや優勝したゼミの担当教員が選んだ音楽を掃除の時に流す等も面白い取り組みである。

<グループ3>（渡邊、柏倉、荒木、太田、塚原、学生2名）

- ・校内が汚れていると気になるというように、校内美化に対する個々の意識をもてるようになる取り組みが必要ではないかと。
- ・これまで行ってきたゴミの分別は分りやすく、以前よりは浸透してきている。
- ・ゴミ箱の数も十分であり、ゴミを溜め込まずに捨てることのできる環境は整っていて良い。
- ・専攻科の学生が学友会総会の時に全学生へ向けてゴミの分別等の呼びかけを行っていることは効果があることなので、続けていってほしい。

<グループ4>（高桑、松田水、大関、高橋明、学生2名）

- ・個人個人で小さいゴミでも拾うことや、飴の殻などもゴミ箱に捨てること等日頃からの校内美化に対する意識を高め、習慣付けてもらうことが学校全体を効率よくきれいにできることに繋がるのではないかと。
- 整美委員が授業最後に机の中のゴミはないか等の声掛けがあっても良いのではないかと。

<まとめ>

今回は学生参加の懇談会であり校内美化について、学生の視点からの意見が多く出て良かった。今後もきれいな環境で学生の学校生活が充実したものになるように、短大全体で取り組んでいきたい。

6月 定例FD・SD懇談会記録

日時：平成29年6月29日（木）

場所：本学会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、松田知、太田、小林、松田水、花田、大関、樋口、宮地、伊藤、白崎、原田、斉藤、片平 坂井氏（坂部印刷）角田氏（グランド印刷）学友会4名

司会：松田知 記録：樋口

月目標：学生が適切な身なりの認識をもつことができるような働きかけを行う。

懇談会テーマ：羽陽短大の広報について考える

懇談会内容

テーマを「羽陽短大の広報について考える」と設け、うよたんらしさをあらわすキーワードなどについて、短大の広報を担う坂井氏、角田氏を招き、学生4名も交えて懇談した。

<グループ1>（松田知、太田、片平、角田、学生1名）

・うよたんらしさをあらわすキーワード

→ほがらかさ、アットホームな、素直さ（学生の）

・昨年度から大学要覧が一新され、見やすさ、デザインの面で良くなった。

・他大学であれば、広報媒体にスタイリッシュさを求めることもあるとのことであった。

・通う学生からすると、小さい学校、小規模大学であることがとても魅力的である。教員がほぼ全員の学生の名前を把握していることや、学生と教員がお互いの個性を理解し合うことができているのは小さい学校の利点だと思う。

<グループ2>（荒木、小林、松田水、大関、原田、学生1名）

・うよたんらしさをあらわすキーワード

→やさしさ、根気、本気、フワびりっ（フワフワだけでもピリッとメリハリが効く感じ。）

・うよたんを色で表すと黄色やオレンジ。太陽のようなイメージ。

<グループ3>（渡邊、柏倉、高橋寛、白崎、酒井、学生1名）

・うよたんらしさをあらわすキーワード

→人を笑顔にする、アットホーム

・現在の「人を好きになる、自分を好きになる。」というコピーはややわかりづらいかもしれない。

<グループ4>（高桑、樋口、宮地、伊藤、斉藤、学生1名）

・うよたんらしさをあらわすキーワード

→表面的にはゆるいが中身は硬派（二面性、ギャップを広報する）、フレンドリー、ゆるフワ系（クラゲ、アルパカ、伊藤先生）、硬派、よりそう系、学生と教員の距離が近いからこそ言えること

・マスコットをつくる。（名前：うよたん、ウヨタン）

・学外への広報として、ゆるさが全面に出るのも問題ある。

・学生のやさしさ。学生の明るさを押し出す。

<まとめ>

学外のゲストを招き学生も参加し、ざっくばらんに本学のイメージを話す機会となった。今後も教職員が学生やその他の様々な考えを取り入れ、教育改善や学生募集に当たっていく必要があると思われる。

7月 定例FD・SD懇談会記録

日時：平成29年7月27日（木） 12:15～12:55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、松田知、松田水、太田、花田、大関、樋口、宮地、伊藤、白崎、菅原、今野、大野澤（欠席：小林）

司会：大関 記録：松田知

月目標：「学習環境を整えるために何ができるかを考えよう」

懇談会テーマ「学生募集について考える（SNSの活用など）」

懇談会内容

司会が本学のHP、公式Facebook・Twitter、動画をプロジェクタで提示しながら、それぞれのネットワークメディアの概要について解説後に、懇談会の趣旨について説明し、懇談を開始した。

<グループA>（渡邊、高桑、太田、白崎）

- ・Facebook を開設後、学生から感想や意見が寄せられるなど学生募集のツールとして有効であると感じる。学生からは、Instagram の開設の意見もあるが、管理者の負担を考慮すると直ぐの開設は難しいと感じる。今後本学ならではの情報を提供するなど、その方向性を明確にする戦略が必要である。

<グループB>（大木、荒木、伊藤、今野、大野澤）

- ・懇談会に出席し、SNS を少し理解できた。学生の情報収集の手段であることも理解できた。利用には、個人情報の管理やセキュリティに配慮する必要があると感じた。

<グループC>（高橋寛、樋口、菅原、松田知）

- ・SNS が情報収集に活用できるツールであることが理解できた。卒業生が「いいね」をしているようであるが、高校生と繋がりがある在学生在が「いいね」をしてくれると、より効果があると考ええる。また、学生の授業などの取り組みや感想を載せることにより、高校生に本学がより理解されると考える。

<グループD>（柏倉、松田水、大関、宮地、）

- ・学生生活の楽しさ、カリキュラムなど本学が伝えたことは多いが、その方向性を明確にし、運用マニュアルを作成し、各メディアで統一した広報を行う必要がある。

<まとめ>

- ・SNS は、学生募集など本学の広報ツールとして有効である。今後、本学らしさを出せるような方向性を明確にし、それらを各メディアで統一して広報できるよう戦略を立てる必要がある。また、個人情報やセキュリティについて配慮を怠ることのないようにする必要がある。

9月 定例FD・SD懇談会記録

日時：平成29年9月27日(木) 12:15～12:55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、小林、松田知、松田水、太田、花田、大関、樋口、宮地、伊藤、白崎

司会：柏倉 記録：小林

月目標：年間目標の中間評価と修正を行い、課題を明らかにしよう

テーマ：学生の話から、授業の改善を考える

懇談会内容：前期に実施した参観授業（主に1年次の授業）の記録をもとに、より良い授業環境を考える。

<グループA>（荒木、伊藤、1年次学生2名）：「社会福祉概論」（伊藤）

- ・授業の内容で、講義と講義内容に関するDVDを観ると理解が深まる。自分の体験したものだとさらに理解と興味が深まる。（学生①）
- ・自分が子どもの目線になる、対象者の目線になることが大事だということを学んだ。（学生②）
- ・（教師は）その日のテーマのDVDを意識して流しているが、学生の興味があるものだと集中して観るが、興味のないものだと集中しない。学生が興味を持つDVDを選定することが、難しくもあり大切でもある。

<グループB>（学長、大関、宮地、白崎、塚原、1年次1名）：「教育原理」（大関）

- ・入学した時は短大の専門（幼児教育、福祉）を学びたくて入ってきているが、なにも（経験して）ない状態で見た保育の現場と勉強してから見た保育の現場を比べると、（後者のほうが）見方が深まる。教師の意欲が学生に伝わってくるので頑張ろうと思うようになった（ずっとしゃべっているけど、より一生懸命聞こうとする気になる）。（学生）

<グループC>（柏倉、大木、松田知、樋口、石井、1年次1名）：「図画工作」（樋口）

- ・図画工作は保育現場でよく使う教科で、現場で使える面白い授業が多くて楽しい。一人の制作も楽しいが、みんなで協力して制作するものもあっていいと思った。（学生）
- ・一人の制作が何人分も集積してみんなの制作になっていく。

<グループD>（花田、松田水、太田、諸橋、小林）：「保育内容総論（2年次）」（花田）

- ・「平成29年告示新幼稚園教育要領と新保育所保育所指針」についての解説。改訂されたポイントが簡潔にまとめられており、学生が理解しやすい。
- ・穴埋め式プリント、学生にプリントを演技的音読させたり、色々な素材を自由に選ばせて使わせる学生参加型の授業で、本学の学生には大変効果的な授業方法だと思った。

<まとめ>

- ・座学だけよりも、身体・声を使ったり制作作業を好む本学の学生の特性に合わせた授業をすると、学生の意欲や授業への参加度が増すということがよくわかった。

10月 定例FD・SD懇談会記録

日時：平成29年 10月26日(木) 12:15～12:55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、高桑、小林、松田知、松田水、太田、花田、大関、樋口、宮地、伊藤、白崎、浦山、片平、斉藤（出張等による欠席：柏倉、高橋寛）

司会：松田水 記録：太田

月目標：学生とのコミュニケーションで分別ある使い分けができるような支援を行う

懇談会内容

<グループA>（花田、伊藤、白崎、斉藤）

- ・使い分けができるような支援はあまりできていないが、職場では使い分けは必要となる。例えば、自衛隊ではしっかり行われている。本学の学生には「自称」人見知りが多く、そのような学生は入学当初には学内での挨拶も出来ない状態からスタートする。そのため、挨拶が促されるような気楽な状態を生じさせることを初めのステップにしている面がある。そのことは、挨拶実施に良い影響をもたらしているが、気楽な状態が継続している現状もあるため、使い分け支援の開始時期をどのようにするかが課題である。

<グループB>（大木、高桑、宮地、片平）

- ・コミュニケーションを交わす中で、相手に不快な気持ちを与える言動があることを知らない学生がいるため、その点は教えるべきである。教えるに当たっては、決まった教員だけが実施すると「あの先生は厳しい」という印象を学生に与えるだけに終わってしまうことがあるため、教員全体で指導する必要がある。
- ・2年生になると「慣れ合い」が生じる。慣れることは良いことだが、程度が行き過ぎないように線引きを教えたい。
- ・学生に連絡する際には、SNS、口頭双方のやりとりの場面があるが、教職員側で使い分けることも必要である。またそれと同時に、使い分けについての学生への指導も必要である。

<グループC>（渡邊、小林、大関、樋口）

- ・今年度の1年生は、大変礼儀正しいという印象を与えるが、別の視点からは、なかなか自己表出できないという見方にもなりそうある。分からないことがあった時に、どのように質問したらよいのか分からない場合もあるだろうが、自分から聞こうとしない面があるように最近感じられる。たとえ最初は馴れ馴れしい話し方であっても、学生が自分からコミュニケーションをとれるようになることを重視し、その後同時に同時進行で分別を教えることが大切である。

<グループD>（荒木、松田知、松田水、浦山、太田）

- ・実習巡回や就職アフターケア巡回等で、学生や卒業生に対して「分別がない」という評価を聞いたことはない。学生と教員の距離が近いという本学の雰囲気の中だからこそ比較的ラフな言葉遣いになるのではないかと。学生は学生なりに、言動の使い分けを上手に行っていると思う。

<まとめ>

- ・本学の学生においても、SNSの普及で直接のコミュニケーションが不足しているように感じる。そのような状況だからこそ、直接話をするところから始めることは大切である。どのような場で、どのようなことを、どのように話せば良いのかということを経験者が共有し、皆で指導に当たることが必要だと思ふ。

11月 定例FD・SD懇談会記録

日時：平成29年11月30日（木） 12：15～12：55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、小林、松田知、松田水、太田、花田、大関、樋口、宮地、伊藤、白崎、菅原、原田、高橋明、専攻科学生4名（出張等による欠席：なし）

司会：高橋寛 記録：花田嘉雄

月目標：実習体験について学生と話をし、学生の振り返りを支援しよう

テーマ：実習報告会を充実させる方法について考える

懇談会内容

<グループA>（渡邊、大木、高桑、太田、大関、専攻科学生1名）

- ・参加学生からの質問が活発になる工夫や、質問が出やすい雰囲気づくりが必要であり、その方法として、①レジュメを事前に配って目を通すようにしておく。②事前に全学生にアンケートをとり、質問表を作成しておき、発表者がそれについて答えるなどの提案があった。ただし、②については、学生が自分から質問することに意義があるのではとの意見もあった。
- ・例年、レジュメを読むだけの発表者もあり、更に深い内容の発表になるようレジュメ指導担当がレジュメ指導時にしっかり指導することが必要である。
- ・その他、発表者の実習種別や人数等、分科会の構成について話し合われた。

<グループB>（柏倉、荒木、松田水、高橋明、専攻科学生1名）

- ・学生の意見として、毎年レジュメに書かれている施設理念は必要とは思えない。むしろ、その理念を基に施設がどのような取り組みをしているかに意味があるのでは？との意見があった。また、1年生に対しては参考になるような、2年生に対しては振り返りとなるような、専攻科の学生に対しては今までの実習からの学びを伝えるような内容にすると良いのではないかと意見があった。

<グループC>（松田知、花田、樋口、白崎、菅原、専攻科学生1名）

- ・学生は日誌の書き方に一番苦勞しているようで、その書き方の共有ができると良い。
- ・写真等の視覚的な資料があると良いのでは。
- ・実習報告会ほどの分科会も大人数であるので、少人数制にすると良いのでは？例えば、2年生はゼミ単位で各分野（文学ゼミなら子どもの言葉や言葉かけ等）について討論し、卒業研究としてまとめ、1年生は興味のある分科会に参加するなど。

<グループD>（高橋寛、小林、宮地、伊藤、原田則、専攻科学生1名）

- ・分科会を増やし、少人数化すると良いのでは？
- ・1月は時期的に遅いのでは？実習を終えて期間が開きすぎているので発表者が実習についてあまり覚えていないのでは？等の意見があった。

<まとめ>

- ・実施時期が卒業研究等と重なる時期であり、その時期やあり方等について今後も検討が必要である。

12月 定例FD・SD 懇談会記録

日 時：平成 29 年 12 月 21 日（木） 12：15～12：55

場 所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、小林、松田知、松田水、太田、花田、大関、樋口、
宮地、伊藤、白崎、今野、大野澤、諸橋

司 会：白崎 記 録：柏倉

月目標：「ゼミの活動を振り返ろう」

懇談会テーマ：「ゼミ、卒業研究で育てる能力について考える」

懇談会内容

<グループA>（大木、小林、松田水、今野、大野澤）

- ・アルバイトが忙しくてゼミに来ない学生がいたり、何でもはっきり言うグループがいるとおとなしい学生が来なくなったりすることがある。
- ・以前は、学生セミナーの中で卒業論文の中間発表をしたこともある。
- ・調理室で作って食べたり、楽しむ活動が多くなっているようだ。たまにはいいが、頻繁に行うのはどうだろうか。5時限目という設定がよくないのだろうか。

<グループB>（渡邊、高桑、太田、樋口、宮地）

- ・従来のやり方では限界であるように思う。ゼミを通してどういう能力を育てるかを、しっかり考えた方がいいのではないか。
- ・ゼミについては、いろいろな点について考え直す時期ではないだろうか。

<グループC>（高橋寛、松田知、花田、伊藤、白崎）

- ・実践研究という感じで運営していけばいいのではないか。
- ・どれくらいのレベルの論文を目指して指導するか、考えるとよい。

<グループD>（荒木、柏倉、大関、諸橋）

- ・実務的指導を行うのは効果があるのではないか。たとえば、履歴書や実習日誌の書き方を指導する。
- ・自分の思いや悩みを言える場にするのもいいと思う。学生同士が活発に交流できるようにしていきたい。
- ・卒業論文にこだわらず、他の能力を育てることを考えた方がいいように思う。文章力や表現力等を育てるような取り組みを考えてみてはどうか。

<まとめ>

- ・ゼミに有用な面があるという認識は一致しているが、現状について多くの教員が疑問を抱いていることが改めて確認できた。
- ・どんなねらいで、どのような活動を行う場であるのかという位置づけと、活動内容の大まかな枠組みについて検討し、共通部分とゼミごとに異なる部分を明確にした方がよいようである。
- ・卒業論文に関しても、内容や分量等について検討する必要がある。
- ・昨年もゼミのあり方について、6通りの位置づけが提案され、話し合いがなされたが、そこで検討したことがそのままになっている。ゼミの改善を実行すべきではないか。

1月 定例FD・SD懇談会記録

日 時：平成30年1月25日（木） 12：15～12：55

場 所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、小林、松田知、松田水、太田、花田、樋口、宮地、
伊藤、白崎、塚原、石井、高橋明、（出張等による欠席：大関）

司 会：荒木隆俊 記 録：伊藤和雄

月目標：「2年間、あるいは1年間の学生の成果を見つけて、褒めよう」

テーマ：「業務の効率を上げる方法を考える」

懇談会内容

<グループA>（渡邊、高桑、高橋寛、白崎）

- ・仕事を放置しない。
- ・フォーマットを利用する。

<グループB>（大木、小林、宮地、高橋明）

- ・業務のマニュアル化。
- ・担当変更時に引き継ぎをしっかりとる。

<グループC>（松田知、松田水、太田、樋口、塚原）

- ・業務のマニュアル化。
- ・4月の業務多忙の為、3月中に委員会、職務分掌を提示する。
- ・授業出欠席状況把握の簡素化。

<グループD>（柏倉、荒木、花田、石井、伊藤）

- ・業務のマニュアル化。
- ・業務分担に偏りがある。
- ・業務内容の見直し。
- ・担当任せで、担当者負担が大きい。

<まとめ>

- ・仕事が増える一方で、話合える雰囲気がなく悪循環になっている、常日頃から話し合える雰囲気が大切である。
- ・会議時間の短縮。
- ・長期展望が必要である。

2月 定例FD・SD懇談会記録

日時：平成30年2月22日（木） 12：15～12：55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、小林、松田知、松田水、太田、花田、大関、樋口、
宮地、伊藤、白崎、大野澤、浦山、片平

司会：大木みどり 記録：高桑秀郎

月目標：「今年度の自らの教育活動を振り返り、課題を見つける」

「来年度に向けた明確な教育活動の展望を立てる」

テーマ：「2月の月間目標の反省・FD／SD年間目標の反省」

懇談会内容

<グループA>（柏倉、大木、小林、松田水、片平）

- ・本学の学生の特性として、目に見える具体的な目標があると頑張れるので、具体的な到達点を教員側から提示することで意欲的に取り組めるようになるのではないか。
- ・スマートフォンの使い方については、約束事を決めて丁寧に指導していくと、授業中に使わないということを達成できた。
- ・休む学生に対しては、レポートを課し、欠席した部分の学習内容を補完している教科もある。

<グループB>（渡邊、花田、伊東、白崎、浦山）

- ・来年度のテーマや月目標としてこういうのがあったら良いと話に出たのが、学生の離職率が昨年度卒業生に多かったので、離職率を上げないようにするために何ができるかと、明るい髪の色のは是非についてということ。
- ・「あるといいかな」というよりそれについて話してしまっていた。

<グループC>（荒木、松田知、太田、大関、宮地）

- ・学ぶ意欲を駆り立てるためには、個別指導の充実が必要であろう。
- ・教員一人一人は頑張っていると思うので、お互いそのことを讃えあっていた。
- ・教育活動はネガティブに行うものでなく、ポジティブに行って行くべきだと思う。

<グループD>（高橋、高桑、樋口、大野澤）

- ・出席率向上へのアプローチとしては授業への意欲を増やしていくことだが、具体的にどんな方法があるか。
- ・実習や「すこやか」、体験型学習など外で学生が活動を行ってきたときに、個別指導も行いやすく、学生の学びの実感が大きいようであるので、外の活動に気軽に行けるようにしてあげたいが、そうでないので、気軽に学生が外に出られて活動できるような仕組みが必要ではないか。
- ・学生が意欲・興味を駆り立てられるように、教職員が「自分の一冊」を持ち寄って語り合うみたいな機会を設けてみたい。

平成 29 年度 学内FD・SDワークショップ

「学外から見る羽陽短大 ～うよたんのウリを考える～」

講師：都築 弘太郎 (㈱ リクルートマーケティングパートナーズ)

助言者：岩田 好造 (㈱ リクルートマーケティングパートナーズ主任研究員)

日時：平成 29 年 7 月 13 日 (木) 15 : 30～

場所：会議室

司会 高桑、記録 小林

1. 学長挨拶

本学では、教員も職員も「短大の将来を考えましょう」という共通意識のもと、お互いの職業内容を知り、よりよいあり方をFD・SDで探ろうという試みをしている。今回のワークショップを通して、外部から見た本学のアピールポイントを探っていきたい。

2. リクルートの岩田氏から

いまどきの高校生は、ツイッターやインスタで情報を得ている。ヤフーやグーグルは使わない。情報発信する側も、高校生の使用するツールに向けて発信する必要がある。

3. パワーポイントと配布資料を使いながらのプレゼンテーション (都築氏)

「相手を口説く」ために

→自分の状態を把握する

→目標課題を設定

→どんな人を口説くか

→競合相手に勝つには？

4. グループ・ディスカッション ; 「この短大の魅力は？」

A: (高桑、白崎、諸橋、小林)

イモ天 (イオンモール天童店) が近い→コーヒー、食事もできるし、バイト先としても役立っている。このような短大付近の環境の良さをアピールする。

B: (渡邊学長、高橋寛、宮地、斉藤、塚原)

卒業生がたくさん来る短大。「私にとってこの短大はお家だった」という卒業生の言葉が教職員の励みになっている。

C：(柏倉、松田水、花田、原田、大野澤)

卒業生が短大に顔を出すことが多い。赤ちゃん連れの卒業生が、何年にも渡って何回も来てくれる。海外勤務の卒業生が、数十年ぶりに某先生に会いに短大に来てくれる。

D：(荒木、太田、樋口、菅原、石井、片平)

「こだわり」に関心をもって話し合った。在学当時は破天荒だった卒業生が、卒業後違う分野に進学したり、活躍したりしている。「つなぐ・命・生きる」をすべての角度から考えられる。身をもって知ることができる。それが基となって、後の成長につながっていく。⇒「つなぐ」

E：(大木、大関、伊藤、今野、高橋明)

全教員が全学生の顔を知っていて、名前を呼べる。卒業後や退学後もアフターケアをしている。学生との付き合いに継続性がある。

○他大学を選んだ学生のコメントを参照

「幼稚園教諭、保育士資格が卒業時二つ同時に取れるから」

⇒羽陽短大もそうなっているのに、何故かいまだに高校生に伝わっていない。

5. 岩田氏によるまとめ

- ・「この先生はずっと面倒をみってくれる」という信頼感を高校生とつくっていくと入学につながる。「一目惚れ」感があれば後々までついてきてくれる。「口説く」スキルを磨くこと。ストーリー性。
 - ・「友だちではないけど先生過ぎない」というフレーズが良い。
 - ・今の(本学の)パンフやHPを見た限りでは、そのことが高校生に伝わっていない。
- 高校生が使っているツールを、宣伝に使うことの強み…うよたんでインスタが見られないのが残念。



平成29年度 後期学内公開授業・授業検討会

記録：柏倉 弘和

1 公開授業の概要

- 日 時：平成30年1月24日（水）4時限目
- 科 目：保育実践研究Ⅱ
- 担 当：大木 みどり 教授 樋口 健介 講師 白崎 直季 講師
- 会 場：7号室
- 対 象：2年次後期 選択
- 参観者：本学専任教員

2 授業検討会

- 日 時：平成30年1月24日（水）授業終了後
- 場 所：7号室
- 参加者：本学専任教員
- 司会者：柏倉 弘和 教授 小林 浩子 准教授

(1) グループ討議

○A グループ

メンバー：

渡邊、大木、高桑、花田、樋口、小林（進行）、松田（記録） 欠 荒木、宮地

自評（樋口）：3名を代表して樋口先生より

この授業内容は、昨年度から実施し今年で2年目である。15回の授業で、高齢者施設での実践4回、幼稚園での実践1回を実施している。

テーマとして「保育」と「介護」の共通項とし、学生と教員がワークショップ形式で進めている。3名が表現（体育、図工、音楽）を担当しているので、体育、図工、音楽はコミュニケーションとしての手段であるということも理解できたらと思っている。

昨年度は文書での記録であったが、本年度は、視覚化してドキュメンテーション記録にした。これにすることにより、具体的にやりたいことをメモさせ、考えさせるようにしている。授業では、振り返りと改善を繰り返している。

第1回目の実践は、教員が企画し、以後は学生が前述の方法で企画をしている。

本日の発表は、前時の後半と本時の前半で計画した。

グループ懇談内容

・各回が単発的で、実践力を付けるには良いが、共通項は学生も十分理解できていないように感じる。これまでの実習や経験を活かすことにより、共通項はより理解できるのではないか。授業のテーマが明確になっていない。

対策として

施設での4回の実践後に学生での模擬保育をする。グループを変えるなどしてワンクッションおいてはどうか？

科目担当教員からは、授業や実践を通じて色々なことを学ぶというねらいがあって、よいのではないかとの話があった。

- ・3名の教員のそれぞれ専門を生かした実践となっている。
- ・実践の授業だと、参加に温度差が出たり、企画に積極的に参加しなくとも手足を動かしただけでもうまくできたと勘違いする学生も出てくると思うが、その対策は？

振り返りをまとめるときに、全員の振り返りを文書化して記録に残すようにしている。

利用者一人に対して一人の学生が対応するというような人数配当になっているので、全員が活動に参加している。

記録については、分担して環境、言葉のやり取りなど様子をできるだけ記録に取るようにしている。

○B グループ

メンバー：白崎、大関（記録）、伊藤、高橋寛、柏倉

質問1：企画、実践、振り返り、発表までをグループ単位で行う際の、ファシリテートの方法にコツはあるか。

回答1（授業担当）：まず、経験や学びを学生の中にとどめられるよう、実践記録用紙を準備してしっかり可視化された記録として残すように指導している。記録をベースに活動内容を繰り返し意識化できるよう促している。今まで主に幼児と関わってきた学生にとって、高齢者との関わりには不安が大きく、最初から「自分から」関わろうとすることは困難である。ただし、学生は実際に、職員がどのように高齢者とコミュニケーションをとっているのか、よく見ている。そうした観察後の実際の関わりを通していく中で、話す距離といったところから対応まで、変化していく様子がみられる。それらは気づき、変化の蓄積といえるものであろうから、それらを意識化させるようにしている。

意見1：5回の観察・実践を繰り返す、まさに学生がP D C Aサイクルを回す授業フォーマットになっており、大変有意義な実践になっていると感じる。学生自身、自分の中に起きている変化を感じられているのではないか。

意見1を受けて（授業担当）：教材設定のプランニングの際、前回のものを改善するのか、またはすべて棄却して新たな教材を取り上げるのか、その決断も面白い。

意見1'：保育現場における実習を行って後、さらに介護現場での実践を5回行い、その全ての回でP D C Aサイクルを回していくという授業は、本学ならではのものであり、場数を踏ませることで、P D C Aサイクルの枠組みも身に付くだろう。

意見2：福祉に「正解」はなく、「生きる」ということを共通項にして「人を感じる」ことであると考えている。本学の強みは保育と介護の研究機関である。当該授業はその連結を図る内容になっている。また、高齢者とコミュニケーションをとることは、言葉以外の手段、つまり、運動や音楽、造形表現といった手段で幼児とコミュニケーションをとることとも関連してくるだろう。

意見3：今日の介護現場をみると、行事やレクリエーションなど、「やりっぱなし」であることが多いように感じる。専門家とは、研究も行えるべきである。授業を通して実践研究の方法を学べれば、現場の見方も変わるだろう。また、介護福祉施設で演習を行うことが関心を惹起し、本学専攻科への進学率上昇に繋がるかもしれない。

意見4：「言葉」の授業を行っているが、言葉以外の伝え方があると学生に説明しても、実感がなく受け入れられていないのではないかと感じる。学生の報告、レポートを概観す

ると、保育と介護の共通項として「コミュニケーション」、「人権」、「チームワーク」、「個性尊重」といった言葉が目立っていた。当初は言葉でのコミュニケーションも難しかった学生も、伝える形の多様性を感じながら実践を行うことで、そうした共通項を感じたのかもしれない。

意見5：高齢者を対象とした実践と幼児を対象とした実践を体系的に行っておくことは、就職後にその役割を担える人材として重宝されるのではないか。また、高齢者と幼児の混成集団を対象として実践しても面白いのではないか。

意見5を受けて（授業担当）：昨年度案があったが、インフルエンザが流行する時期であったり等、危機管理の面から未実施に終わった。高齢者の本当にうれしそうな表情を学生に見せたい、という思いもあるため、その機会にはなったように感じる。

意見6（授業担当）：カリキュラム上可能ならば、1年次の時から履修させたい、実施したい授業である。実践以外の部分にもより時間をかけて指導できれば、その実践の方法を一般化して、より多様な保育現場、介護現場に応用できるものにしていけるかもしれない。

意見7（授業担当）：実践を行う場合、高齢者との関わり方一つをとっても、学生間で濃淡が生じてしまう。学生各人の実践の質をどのように保証していくかが課題である。人見知りの学生が多い印象がある。「雑談力」のようなものも身に付けさせたいとも考えている。

(2) まとめ

- ・保育と介護の共通点について考えるという授業のテーマが良いと思う。
- ・PDCAサイクルが成立していると考えられるので、他の科目と一緒にあったりすることで、より充実させることができるのではないか。
- ・実践への参加度において、学生により差が生じるようであるが、その点についてどのように指導していくか、個別指導のあり方が大切であると考えている。

第9回 大学間連携SD研修会
「学生獲得のための大学職員の企画力と行動力」

報告：大学改革推進センター 諸橋 理恵

1. 日時

平成29年9月1日（金）9：30～18：00

2. 会場

山形大学小白川キャンパス 基盤教育1号館

3. 本学参加者

大学改革推進センター 諸橋 理恵

4. プログラム

9：30～9：50 開会・オリエンテーション

9：50～10：20 アイスブレイキング（自己紹介・大学紹介・グループワーク）

10：30～12：00 <プログラムⅠ>

- ・グループワーク「自学の学生獲得の事例」
- ・ミニレクチャー「学生獲得の企画と行動」

13：00～14：30 <プログラムⅡ>

- ・グループワーク「バーチャル大学の学生獲得の企画を練る」

14：40～16：10 <プログラムⅢ>

- ・グループワーク「バーチャル大学の学生獲得の実践計画を練る」

16：20～18：00 <プログラムⅣ>

- ・発表会
- ・修了式

5. 内容

研修会には東北を中心に29名の大学職員が集まり、5班（1班5～6名）に分かれグループワーク中心で進められた。班分けではA班になり、山梨学院大学、秋田県立大学、弘前医療福祉大学、桜の聖母短期大学、秋田大学の5校と同グループであった。

最初のグループワークでは自己紹介と大学自慢を行い、その後アイスブレイキングとしてテープやのりなど道具を一切使わず、新聞紙1部だけでどれだけ高いタワーが作れるかを班ごとに競った。

プログラムⅠの山形大学 小田隆治教授によるミニレクチャー「大学の現状認識と学生

獲得の方法」では、今まで 120 万人で横ばいだった 18 歳人口が減少傾向にあり、7 年後の 2024 年には 14 万人減の 106 万になる。日本の進学率は専門学校を含めると 80%を超えておりこれ以上の増加は見込めない。この厳しい環境下で大学が生き残るためには、自校の売りを明確にし、教職員と学生が営業マンとなり売り込んでいくことが重要と学んだ。

「自分が知っている学生獲得の方法」では班のメンバーに自校が行っている学生獲得の方法を紹介した。オープンキャンパス資料・キャラクター・SNS を全て学生が作成、大学案内に全教員の顔写真を掲載、トップセールス、自衛隊への学生募集、企業とのコラボレーション（お弁当を共同開発）、進学希望者の最終受け皿となるよう 3 月末に入試を実施など各校独自の募集をしていた。

プログラムⅡ・Ⅲでは「バーチャル大学の学生獲得作戦」と題し、班ごとに個室に移動し、全体発表に向けた話し合いと Word、PowerPoint の作成を行った。

大学規模や学部・特性・地域性、ライバル校の状況、学生確保のためのスケジュール、成果、波及効果など 14 項目について検討した。A 班では宮城県名取市にある「楽天大学」を仮想し、学科新設を実施・予定している大学が多かったため「国際スポーツ学科」新設に向けた学生募集に取り組んだ。

プログラムⅣの発表会では班ごとに企画した内容を PowerPoint と寸劇を交えて発表した。会の最後に修了式が行われ、参加者全員に修了証書が配られた。

6. 参加しての感想

他大学の方と情報交換ができる機会はほとんどないので貴重な体験であり、多くのことを学ぶことができた。自己紹介後に行ったアイスブレイクのおかげで班のメンバーとすぐに打ち解けられたと思う。

発表を控えたグループワークは約 3 時間で大学仮想から発表まで企画するもので、限られた時間の中でメリハリをつけて企画をする難しさを痛感した。

班分けに関して募集対象が被らないよう考慮してくださったとのことであったが、四年制大学と本学とではターゲット層がだいぶ違うと思う。なかなか難しいかもしれないが「四年制大学と短大」や「国立・県立と私立」などもう少し共通項を加味して班分けいただけたら、さらに有意義な時間が過ごせるのではないかと感じた。

第17回 山形大学FD合宿セミナー
—相互研鑽による大学教育の飛躍を目指して—

報告：高桑秀郎

1. 期日：平成29年9月4日（月）～5日（火） 13：00～16：30

2. 会場：協同の杜JA研修所（山形市）

3. 主催：山形大学教育開発連携支援センター

4. プログラム

第1日目

13：45 セミナー開会

14：30 オリエンテーション

14：50～16：20

プログラムⅠ

「授業設計1：アクティブ・ラーニングを導入した授業を設計する」

16：20 アイスブレイキング

16：40～18：10

プログラムⅡ

「授業設計2：シラバスの完成」

18：10～夕食・懇親会、就寝

第2日目

7：30 朝食

8：30～10：00

プログラムⅢ

「アクティブ・ラーニングの模擬授業の練習」

10：10～11：40

プログラムⅣ

「アクティブ・ラーニングの模擬授業の発表」

11：40～ 修了式、解散

5. 参加校：18校24名

6. 本学参加者：教授 高桑 秀郎

7. 内容報告

グループ学習形式で、参加者が4班に分かれ、それぞれの班で様々な目標のあるアクティブ・ラーニングを導入した授業を設計する。高桑が参加したA班は、了徳寺大学・岡村先生（柔道整復）、常葉大学・関先生（東洋医学）、日本保健医療大学・稲田先生（英語教育）、愛知工科大学・田川先生（バーチャルリアリティ）、山形大学・松井先生（有機エレクトロニクス）の6名で構成された。

プログラムⅠでは、授業の目標を「主体的に考える力を育成する授業」に設定し、科目名、学習目標（評価の基準となる）、履修の時期について考えた。科目名は学生が受講したくなる興味を惹くものとのことだったので、「人生の咲かせ方～人生一生モチ期～」とし、学生が興味のある恋愛ネタをきっかけに、意欲的に調べ物をし、情報や意見交換を交わす中で、コミュニケーションを図り、自分の気づきを明らかにし、主体的に考えられるようなものを目指した。学習目標は、1. 学生が、自分で調べて、発表できる。2. 学生が人の意見を尊重して聞ける。3. 学生が自分の意見を言える。4. 学生が主体的に考えることができる。5. 学生が自分の人生目標を明確にできる。にした。1年前期の教養共通科目で、受講学生定員は40名とし、指導は男女それぞれ1名の2名によるチームティーチングにすることとした。

プログラムⅡでは、シラバスを作成し、どのような形で授業を進め、具体的にどのようなプログラムを学生に提供していくかを考えた。基本的にチーム内で意見を交換し、意見をまとめて発表、他の班の意見を聞いて、自分たちなりの気づきを毎時間ごとまとめる形を取る。授業の振り返りや次回の課題から、授業外学習を進めていながら、初回の記録と最終講義に至る記録から自分の中の価値観や気づきなどを通して、考え方や成長について自己評価していくこととした。成績の評価については、グループ内活動において、お互いの参加度を評価させる一方で、毎時間ごとの提出物や調べ物、記録やログについて評価することにした。

初日の硬いプログラムは以上になったが、その後、夕食、懇親会を行い、同じA班で集まって、ざっくばらんにプログラムⅠ・Ⅱで話した授業について意見を交換した。

2日目のプログラムは、初日に話した模擬授業の発表を行うとのこと、授業の様子を教員と学生に分かれてロールプレイしているところを10分間の発表としてまとめる。その授業内で起こりうる失敗と、成功に至るプロセスを演じることだった。プログラムⅢはその準備、リハーサルとなり、プログラムⅣは班ごとの発表会となった。

発表はコンテスト形式で行われ、1位、2位の班には賞品が与えられた。残念ながら A 班は同票3位であった。



大学も分野もキャリアも異なる教員の集団での活動であったが、それぞれが抱えている課題を出して意欲的に活動に取り組んでいたのも、プログラムの時間以外（宿舎に戻ってからの自由時間の話し合いなど）も非常に有意義なものであった。学生の学びを進めていくために、学生の興味を引いて、自分たちで課題を追求していけるようにするための仕掛けを教員サイド・大学側がどのように準備していくかを考え続けた2日間であった。

平成 29 年度 全国保育士養成協議会 東北ブロックセミナー 仙台大会
「保育現場における「保育の質の向上」と保育士養成校の役割・課題—実習、就職、研修
の側面を中心に—」

報告：柏倉 弘和、大木 みどり、高桑 秀郎、樋口 健介、白崎 直季

1. 期日：平成 29 年 11 月 18 日（土）13：00～18：00
平成 29 年 11 月 19 日（日）9：00～12：30
2. 会場：東北福祉大学 仙台東口キャンパス 5F フロア
3. 本学参加者：教授 柏倉 弘和、教授 大木 みどり、教授 高桑 秀郎
講師 樋口 健介、講師 白崎 直季

4. プログラム

○一日目

- | | |
|--------|-------------|
| 開会式 | 13：00～13：15 |
| 基調講演 | 13：20～14：50 |
| シンポジウム | 15：00～17：30 |
| 第二回総会 | 17：40～18：00 |

○二日目

- | | |
|------|-------------|
| 分科会 | 9：00～11：00 |
| 特別講演 | 11：15～12：15 |
| 閉会式 | 12：15～12：30 |

5. 内容報告

(1) 基調講演（ワークショップ含む）

報告：柏倉

「保育者養成と育成の当事者による実質的な『対話』と『協働』を生み出す場づくりをめざして ～全国保育士養成セミナー東北大会をふりかえりながら～」

講師：東京家政大学 教授 那須 信樹 氏

1 保育者養成校関連データが物語るものとは？

保育士養成課程等検討会（2010）「今後の検討課題（中間まとめ）」からの検討

(1)保育の専門性の構築と保育士のキャリアアップ

*資質の可視化による共有と研修制度、研修内容の拡充、養成校としての参画

(2)養成施設と保育現場等との連携

*現場との実質的な協働に向けた取り組み

- ・「養成」段階から「育成」段階へのシームレスな移行
- ・「実習」指導の位置付け再確認
- ・実習指導担当者の業務内容、教授（指導）内容の見直しによる各授業担当者の授業内容の見直しと連携
- ・実習指導担当者の資格要件の検討

(3)養成施設の質の確保と向上

- ・独自性や特色という名の独善性に陥ってはいないか
- ・カリキュラムのさらなるスリム化（幼稚園教諭養成課程との関係性）
- ・学生参画によるカリキュラム構築（カリキュラム構築の当事者の一人として）

2 平成 28 年度全国保育士養成セミナー東北大会を（少しだけ）ふりかえる

はじめに

保育士養成校教員が存在すべき必然性とは？

保育士養成校が存在すべき必然性とは？

「保育士養成のアフォーダンス」の具現化

2-1 全国保育士養成協議会「定款」に示された本協議会の目的と事業

2-2 『保育士養成のあり方に関する研究』（2016年4月）報告書より

2-3 『保育士養成のあり方に関する研究』（2016年4月）に示された「まとめと提言」

3 実質的な協働に向けた共通語の獲得

3-1 新保育所保育指針「改定」のおおまかなポイントとは？

3-2 新しい保育所保育指針に謳われた「キャリアパス」と連動した組織的な保育力の向上に向けて

4 「共通語」を意識しながら実際に対話してみる

「幼児教育」と小学校教育をつなぐ

～非認知能力の基礎と認知能力の基礎をはぐくむ～

5 自律的な職能観を有する保育者の養成と育成のための実質的な協働を生み出す対話の場づくりに向けて

保育者の「養成」と「育成」

実習までの工夫・実習後の工夫

実習時の工夫

標準的教授内容・事項をめぐって

6 まとめにかえて ～協働する主体としての当事者意識の醸成を～

○養成・育成当事者の倫理観の醸成

- 「実習生」「初任者」という存在の捉え直し（保育者：子ども、教員：学生との関係性の見直し）
- 魅力ある仕事としての復権への参画
- 各職種協働による保育の展開へ

(2) シンポジウム

報告：柏倉

テーマ 保育現場における「保育の質の向上」と保育士養成校の役割・課題

ー実習、就職、研修の側面を中心にー

発題者Ⅰ 社会福祉法人宮城福祉会 高館あおぞら保育園 園長 山内 綾子 氏

実習指導者研修の開催

指導担当となる主任保育士が実習指導について学ぶ機会がないまま、自らの主観や経験を基に指導にあたっている。その為、指導に関して迷うことも多い。

実習の評価について

- 実習の評価の仕方を明確にする
- 実習生としての基準とは
- 評価項目

保育の課題に対する養成校との連携

○実習巡回訪問の目的（学生を指導する）に養成校の役割として、保育現場の実情把握や課題解決の協働を加える

就職・就職後のサポート体制

保育現場での研修について

発題者Ⅲ 東北生活文化大学短期大学部 教授 三浦 主博 氏

保育者養成における「協働」

- ①養成校内での教員間の「協働」
- ②養成校間における「協働」
- ③養成校と保育現場との連携

「実習」における協働

- <養成校内での実習指導の連携・協働>
- <養成校同士の実習に関する連携・協働>
- <養成校と保育現場との実習の連携・協働>

実習指導内容の標準化

実習指導担当者の要件の検討

キャリア教育の必要性

養成校教員の研修

発題者Ⅳ 東北福祉大学 教授 和田 明人 氏

「見えない教育方法」

「保育の質」とは？

TFU 保育就活のプロセス

I アセスメントフェーズ

II 参入フェーズ

III 評価フェーズ

IV 求愛フェーズ

実習における協働の第一歩、第二歩

第一歩 養成校における実習指導の協働

第二歩 実習教育コンソーシアムの発足

就職における協働の第一歩、第二歩

第一歩 就職指導の協働

第二歩 保育参画の標準化

(3) 平成 29 年度 全国保育士養成協議会 東北ブロック 第 2 回総会

日時：平成 29 年 11 月 18 日 (土) 17:40~18:00

1) 報告事項

①平成 29 年度個人研究助成申請に関わる選考結果について

- ・個人研究助成については、選考の結果 3 件が決定した。(総会資料参照)

②平成 29 年度共同研究助成申請について

- ・「施設実習の実際に関する調査研究(2)」が共同研究として了承された。

H29 年 7 月 28 日申請済 東北ブロック研究委員会

③保育士養成専門委員について(別紙資料参照)

2) 審議事項

①平成 30 年度事業計画案に関する件

- ・平成 30 年度事業計画案が提出され、原案通り了承された。(別紙参照)

②平成 30 年度収支予算案に関する件

- ・平成 30 年度収支予算案が提出され、原案通り了承された。

③全国保育士養成協議会東北ブロック新規加入の承認に関する件

- ・盛岡医療福祉専門学校の新規加入が承認された。(詳細は総会資料参照) 以上

(4) 第1分科会 保育所実習における保育現場と保育士養成校の協働

報告：白崎

・司会者 仙台白百合女子大学 准教授 大迫 章史 氏

保育所実習は、保育士養成教育において、養成校と保育所をつなぐ基幹的な科目と言える。この実習は学生が養成校に在学中に実際の保育現場において保育士に必要とされる職務内容等を学ぶことのできるきわめて貴重な機会でもある。このような重要な意味合いを持つ保育所実習であるため、その実施にあたっては本来保育所と養成校の間で緊密な連携・協力が求められるにもかかわらず、これまでに十分に行われてきたとは言えないのが現実ではないか。保育所と養成校の協働の具体的な実現と可能性を、養成教育における保育所実習へのニーズと保育所における保育所実習への期待とをマッチングさせるなかでさぐっていきたいと考える。

・発題者 社会福祉法人善き牧者会 さゆり保育園

主任保育士 菅野 由美 氏

保育実習における保育現場の思いは、「実習の機会に保育現場の厳しさを実感してもらいたい」、「保育士の姿を見て、いいところを盗んで行ってほしい」など様々な思いがあるが、保育現場の状況は昔と大きく違ってきている。今後は保育士不足を解消するための人材育成ととらえ、保育の意義やその責務の重要性を理解したうえで、そのやりがいや楽しさを実感していく場を提供する必要があるのではないかと考える。そのためには保育者と実習生の「対話」を増やし、「勉強させてあげている」という意識からウェルカムな雰囲気ですべて「育てている」という意識を持つ必要があるのではないかと考える。そして養成校とともに協働していき「人を育てる」意識を高めていく必要があると考える。

・発題者 聖和学園短期大学 准教授 石森 真由子 氏

全国保育士養成協議会では保育実習指導のガイドラインを作成しており、養成校での教育内容や意図を東北ブロック内で詳細かつ組織的に共有することが、保育者養成の共通基盤を協働的に探り始めることにつながると考えている。養成校が期待している実習での学びや経験と実習施設が育てたいこと、または評価したいことにずれがあるため、養成校と保育現場をつなぐために、実習指導内容の共通理解や、効果的な訪問指導などを行っていく必要があると考える。

(5) 第2分科会 施設実習における保育現場と保育士養成校の協働 報告：高桑

本分科会では、施設側、養成校側の発表を踏まえて、施設職員、養成校の教員が本音で意見を交換して、「実習」、「就職」、「研修」における協働のあり方を検討する。

①「施設実習における保育現場と保育士養成校の協働」：東北福祉大学 君島昌志 氏

東北福祉大学における実習指導の方法と実習の評価法の説明。平成 20 年度から 28 年度までの実習の評価の変化。

東北福祉大学の職種毎の就職状況や内定先の初任給等についての報告。

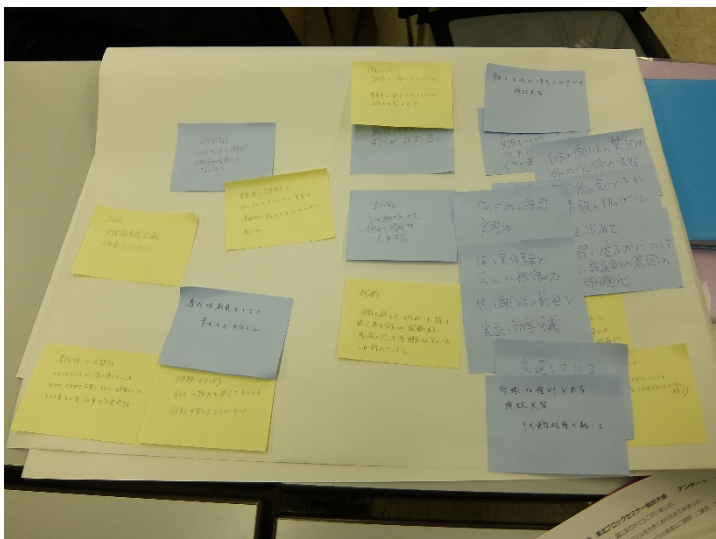
保育実習Ⅰと保育実習Ⅱは連続した時期に同じ保育所で行うため、評価に相関が見られる。保育実習と施設実習の評価には相関が見られない。実習評価は 9 年間で若干の上昇が見られたとしているが、通所施設の評価が総じて高いことと報告していることから、施設実習の実習施設として通所施設が認められ、加わったことによる上昇でないかと感じた。

保育士資格取得者のほとんどは保育所、幼稚園に就職し、児童福祉施設に就職する学生は 25 人に一人である。

②「施設実習における保育現場と保育士養成校の協働」：児童養護施設 丘の家子どもホーム園長 鈴木 重良 氏

児童福祉法改正のポイントは子どもの権利の明記と家庭の支援の強化。東北 6 県における児童養護施設の入所率と入所理由の説明。入所率が低くなると職員数が減らされること、虐待による入所が増えている。人間性と専門性の兼備は切り離せないものである。保育士養成に携わる関係者は保育士という資格取得の支援だけでなく、次世代を担う「人」を育てる重要な役割を持つ人材であるという意識を持つとともに、実習を通して学生から学ぶということを忘れてはならない。

2 名の報告を聞いた後に、「実習」、「就職」、「研修」の 3 つのテーマに沿って、各自ポストイットに感じたことを記入した。その後、6 名の小グループでそれぞれの書いたものについて簡単に発表、意見を交換した。その後、他グループで提示されたポストイットを参観し、他グループでの話し合いの経緯を聞いた。



(6) 第3分科会 就職における保育現場と保育士養成校の協働

報告：大木

司会者・・・東北文教大学 教授 河合規仁氏

発題者Ⅰ・・・社会福祉法人銀杏の会 バンビの森保育園 園長 壺岐 美津子氏

発題者Ⅱ・・・東北福祉大学 教授 和田 明人氏

保育士不足が進む中、各保育施設からは保育士獲得に向けての様々な働きかけが行われている。しかし、募集に関する説明内容や情報は実際の保育現場とは異なり、待遇面や「保育の質」に関しても疑問を持たざるを得ない現状も窺われる。

保育現場ではどのような資質、能力を持った人材を求めているのか、実際の保育現場での学生の就職活動への受け止めや考え方について、また養成校として学生の就職活動に向けてどのような指導をどのようなプロセスで行っていくことが求められるのか、実際に学生の主体的な就職活動、就職活動を通しての学びを養成校としてどのような育てていくことができるのかについて、養成校で学生の主体的な就職活動の実践カリキュラム事例を挙げながら、また現場の保育者と養成校との協働の在り方、関係の構築についての報告、提言があった。

次にグループ討議として、採用側と養成校側からの就職・採用についてのアプローチの仕方について情報交換や課題についての話し合いを行った。

<各発題者の発表概要>

◇バンビの森保育園園長の壺岐美津子氏からは、バンビの森保育園での多様な人材を得るための採用試験の工夫（成績表は不要・自己PR実技・集団面接等）について、また就職後の人材育成のために研修の充実（園内外の参加方の研修の実施）や人間関係の構築（多様性を認め合う風土作り）、継続できるシステム作り（継続して働く環境作り、ステップアップ試験等）の充実を図っていること等を中心に園の様々な取り組みについての報告がなされた。

養成校に望むこととしては、学生と保育現場をつなぐ役割として①しっかりと選ぶ目を育てること（定期的なボランティア活動、目的を明確にした保育園訪問、求人情報を読み取ること等）、②社会人としての基礎・常識の体験の場を作り育てること等を挙げている。

就職に関しては学生も保育園も互いに選び選ばれる関係でありたいと考えており、そのためにも情報の提供や共有を図るための養成校と保育現場の協働の場をどのように構築していくことができるかが課題になるのではないかとの内容であった。

◇東北福祉大学教授の和田明人氏からは、保育者の早期離職の原因（長時間労働・低賃金・人間関係等）の現状を踏まえ、福祉大の保育キャリア教育内容の9つの項目についての報告がなされた。

①保育の就活で気をつけること（就職説明会・見学だけの決定、聞こえのいいキャッチフレーズ等）②現場情報の収集（訪問、見学実践参画、実践の質の調査、卒業生からの情

報等) ③求人票の見方、福利厚生を知る(昇給・昇格、賞与、控除や手取り等) ④採用時期を考える(早い時期、遅い時期何故か等) ⑤保育現場へのアプローチ(研究型ボランティアとして現場で実践—保育実践研究と同じ様に等) ⑥参与観察で動調査するのか(保育環境、子どもへの関わり、年齢構成と保育の熟成度等) ⑦保育組織の成熟度(新卒の平均勤続年数、勤続10年以上の職員数等) ⑧職員同士の人間関係への視点(仲が良い・悪い何故か、園の特徴等) ⑨日常の些細な場面への視点(感動、感情の共有等)

また、就職活動について学生が研究としてまとめた「TUF ミシュラン・プロジェクト2016・2017」の事例も報告された。

就職指導の協働に関しては、養成校内就職指導の協働、保育参画の標準化、就職と研修のシームレス支援、保育現場の課題についての協働の4つの提言がなされた。

(7) 第4分科会「研修における保育現場と保育士養成校の協働」

報告：樋口

○司会者

利根川 智子 氏(東北福祉大学 准教授)

- ・平成29年度からは保育士の待遇(給与)改善の方策と一体化した形で、キャリアパスの仕組みが導入され、保育士のキャリアアップ研修制度が創設されており、これまで以上に多くの研修の開催と受講が求められる。研修ニーズが高まる中、現場の状況に合わせた研修の在り方を探りたい。また、養成校と保育現場の連携の重要性、必要性は言われながらも実践できずにいた現状において、保育現場や養成校としての役割や課題を確認し、相互理解を深めながら、協働の方向性と具体的方略を模索したい。

○報告者

①中島 比呂美 氏(仙台市高砂保育所 所長)

- ・「保育の質の向上に繋がる研修内容を考える～保育の現場から～」をテーマに現場での研修の実践をふまえた報告がなされた。
- ・能動的、主体的に学ぶために、園全体での向上心を持つことが大切である。子どもの心情、理解、意欲、態度、発達のみちすじを保護者に対して、説明することができる能力(保育に意味づけする能力)を養いたい。
- ・子どもたちの発見(生活の中での気づき)を「発見の木」として、保育者が付箋を使ってまとめる実践が紹介された。木は日々、成長し、保護者と保育者のコミュニケーションにも活用できる。
- ・ヒヤリハットの研修では、現場見取り図を描き可視化しながら事例を共有する。写真やエピソード記録を活用し、可視化しながら情報を共有する大切さが強調された。ビデオを活用した研修の事例では、午前の保育をビデオ記録し、昼休みに大学研究者が映像を編集、午後から子どもの10の姿をテーマに編集された映像を見直す研修プログラムが

紹介された。

- ・職員の階層（新人、中堅、リーダー、主任、施設長）に応じた研修の機会が重要である。
- ・養成校からの卒業学生のアフターフォローなど、養成校教員が保育現場を見に来る機会をつくり、それが研修の一環となると良い。

②三浦 主博 氏（東北生活文化大学短期大学部 教授）

- ・『研修』における保育現場と保育士養成校の協働」をテーマに研修制度全般、保育者の研修に対する意識、研修ニーズに対する対応について報告がなされた。
- ・卒業後 2、6、11 年目の保育者へのアンケート調査（全国保育士養成協議会、平成 21 年）が紹介された。専門性を高める方法として、経験年数に応じて、個人→外部研修→組織内と変化する。若手はより実践的な内容、ベテランでは組織運営や特別な支援などが研修内容として希望されていた。
- ・平成 29 年開設のキャリアアップ研修の状況が紹介された。愛知県以外は株式会社に委託し、研修を始めているようである。愛知県では平成 13 年に愛知県現任保育士研修運営協議会が設置されている。一般社団法人化し、キャリアアップ研修を含め、一括で研修の企画運営を実施している。
- ・実習だけでなく、各県単位での研修支援コンソーシアムが必要になる。東北ブロックとしての研修支援体制の整備も必要になる。
- ・研修支援コンソーシアムの役割について、外部研修（Off-JT）として
 - ①研修会講師の確保に対する支援→人材バンク的な役割、各分野の研修に対応可能な講師リストの作成
 - ②研修会の運営に関する調整
 - ③研修会の企画内容の協議・検討が挙げられる。
- ・研修支援コンソーシアムの役割について、園内研修（OJT）として
 - ①園内研修のアドバイザー派遣に関する支援→人材バンク的な役割、アドバイザー可能な教員にリストアップ
 - ②園内研修の内容・方法の開発に関する研究

（8）特別講演

報告：樋口

○講師

網野 武博 氏（東京家政大学特任教授 全国保育士養成協議会 常務理事）

「保育士養成の動向と課題」

- ・主に保育士養成課程検討会で検討されている内容について、議論中の事案も含めて報告がなされた。

- ・階層別保育士等キャリアアップ研修が検討されている。研修のみを対象とするのではなく、例えば実習指導担当者にポイントがつくシステムなどを検討している。
- ・平成 31 年度から新養成課程・試験を適用する。
- ・その他の重要課題について、短期課題として
 - ①実習指導（or 実習指導ミニマムスタンダード）研修の検討と実施
 - ②施設実習指導担当職員の認定・評価システムの検討実施
 中期、長期課題として、
 - ③実習指導担当教員の認定・評価システムの検討
 - ④保育士養成倫理綱領の作成
 - ⑤階層別保育士取得システムの検討と提言
 - ⑥実習施設への本会会員加入呼びかけの検討
 - ⑦国家試験制度導入の検討と提言
 - ⑧保育士法等の検討と提言
 が挙げられた。
- ・第 7 回保育士養成課程等検討会（平成 29 年 6 月 22 日）までに示された論点と現時点で考えられる見直しの方向性が報告された。詳細は第 8 回保育士養成課程等検討会の報告書に記載されている。本報告では論点とそれに対する対応案を抜粋して記載した。

論点 1

改定後の保育所保育指針において、乳児、1 歳以上 3 歳未満児への保育について、それぞれ、ねらい及び内容が示されたことを踏まえた、関連する教科目（「乳児保育」等）の見直しや内容の充実

<対応案>

○教科目の新設

- ・「乳児保育（演習 2 単位）」→「乳児保育Ⅰ（講義 2 単位）」「乳児保育Ⅱ（演習 1 単位）」

○教授内容等の充実

- ・現行の教科目「乳児保育」の目標及び教授内容について、講義科目（乳児保育Ⅰ）と演習科目（乳児保育Ⅱ）に再編し、内容の充実を図る。
- ・併せて、現行の他の複数の教科目（※）に含まれる低年齢児（3 歳未満児）の保育内容に係る教授内容等について、相互の関連性を体系的に整理した上で、各教科目の教授内容等を整理充実する。（※）「保育の心理学Ⅰ（講義 2 単位）」、「子どもの保健Ⅰ（講義 4 単位）」、「保育内容総論（演習 1 単位）」等

論点 2

改定後の保育所保育指針において、幼児教育を行う施設として共有すべき事項として、新たに「育みたい資質、能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」などが示されたこと等を踏まえた、保育の内容に関する教科目（「保育内容 総論」「保育内容演習」等）の内容充実、「保育の計画と評価」に関する教科目の検討

<対応案 1>

○教科目名の変更

- ・「保育課程論（講義 2 単位）」→「保育の計画と評価（講義 2 単位）」

○教授内容等の充実

- ・現行の教科目「保育課程論」の目標及び教授内容について、保育の質の向上の視点や保育に係る計画から評価・改善に至る過程の習得に資するよう、新たな教科目「保育の計画と評価」において、教授内容等の整理充実を図る

<対応案 2>

○教科目名の変更

- ・「保育の表現技術（演習 4 単位）」→「保育内容の指導法（演習 4 単位）」

○教授内容等の充実

- ・子どもの生活や遊びを充実するための援助について、「育みたい資質、能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」などを念頭に置きつつ、より実践的な力を習得できるように、

① 現行の関連する教科目（※）の目標や教授内容について、保育の目標や各領域（5 領域）のねらい及び内容などの全体構造を理解した上で、子どもの発達過程を見通した保育内容を計画し、実態に即して展開する保育の実践力を強化することを念頭に置き、内容を整理充実する。（※）「保育内容総論（演習 1 単位）」、「保育内容演習（演習 5 単位）」

② 現行の教科目「保育の表現技術」の目標及び教授内容について、子どもの発達過程に即した生活と遊びに関する援助に必要な具体的方法や技術を習得させるため、新たな教科目「保育内容の指導法」において、内容を整理充実する。

論点 3

保育の活動全体を通した「養護」の観点、「養護と教育」の一体的展開の重要性、安全な保育環境確保の要請等を踏まえた、関連する教科目の内容充実や再編

<対応案 1>

○教授内容等の充実

- ・保育の活動全般に必要な「養護」及び「養護と教育の一体性」に関連する現行の複数の教科目（※）の目標や教授内容について、各教科目の関連性を体系的に整理した上で、各教科目の特性を踏まえて整理充実する。

（※）教授内容に「養護」「養護と教育の一体性」を明示している現行の教科目

「保育原理（講義 2 単位）」、「保育者論（講義 2 単位）」、「子どもの保健Ⅱ（演習 1 単位）」、「子どもの食と栄養（演習 2 単位）」、「保育内容総論（演習 1 単位）」、「保育内容演習（演習 5 単位）」

（※）教授内容が「養護」「養護と教育の一体性」と特に関連の深い現行の教科目

「子どもの心理学Ⅰ（講義 2 単位）」、「子どもの心理学Ⅱ（演習 1 単位）」、「子どもの保健

I（講義4単位）」、「保育課程論（講義2単位）」

<対応案2>

○単位数の変更

・「保育の心理学Ⅰ（講義2単位）」→「保育の心理学Ⅰ（講義4単位）」

※1つの教科目で単位数を増加させるか、2つの教科目にするかなどについては、今後更なる検討が必要。（1教科目（4単位）又は2教科目（各2単位）など）

○教授内容等の集約整理

・関連する教科目に含まれる以下の教授内容について、新たな教科目「保育の心理学Ⅰ（講義4単位）」に移行する。

イ) 現行の教科目「家庭支援論（講義2単位）」に含まれる教授内容のうち、家族や家庭の理解（家庭の意義や役割、家族関係など）に関する内容

ロ) 現行の教科目「子どもの保健Ⅰ（講義4単位）」に含まれる教授内容のうち、心理的側面の理解に関する内容（論点3（2）③関係）

<対応案3>

○教科目名の変更

・「保育の心理学Ⅱ（演習1単位）」→「子どもの理解と援助（演習1単位）」

（・「保育の心理学Ⅰ（講義2単位）」→「保育の心理学（講義4単位）」（論点3（2）①関係）

○教授内容等の変更

・現行の教科目「保育の心理学Ⅱ」の教授内容について、子どもの理解（観察、記録、省察、評価等を通じた子どもの発達や内面などに関する実態把握）と、それに基づく援助について、より実践的な力が身に付けられるよう、新たな教科目「子どもの理解と援助」において、教授内容の整理充実を図る。

<対応案4>

○単位数の変更

・「子どもの保健Ⅰ（講義4単位）」→「子どもの保健Ⅰ（講義2単位）」

（・「保育の心理学Ⅰ（講義2単位）」→「保育の心理学（講義4単位）」（論点3（2）①②関係）

○教授内容の再編

・現行の教科目「子どもの保健Ⅰ」に含まれる教授内容について、心理的な発達や精神保健など、子どもの心理的側面の理解に関する教授内容を教科目「保育の心理学Ⅰ」へ移行。

・これに伴い、「子どもの保健Ⅰ」は、身体発育や生理機能の特性・発達、子どもの健康状態とその把握、疾病とその予防・対応など、保育における保健的対応に必要な基礎的事項を学ぶ教科目として再編成する。

・なお、低年齢児（3歳未満児）の保健的対応に関する教授内容は教科目「乳児保育」に

においても教授内容を充実・体系化。

<対応案5>

○教科目名の変更

- ・「子どもの保健Ⅱ（演習1単位）」→「子どもの健康と安全（演習1単位）」
（・「子どもの保健Ⅰ（講義4単位）」→「子どもの保健（講義2単位）」）（論点3（2）

③関係)

○教授内容の充実

- ・ 現行の教科目「子どもの保健Ⅱ」の教授内容について、保健的観点に基づく保育の環境整備や健康・安全管理の実施体制など、より実践的な力が身に付けられるよう、新たな教科目「子どもの健康と安全」において、教授内容の整理充実を図る。

論点4

保護者と連携した「子どもの育ちの支援」という視点に立った、関連する教科目（「家庭支援論」「保育相談支「相談援助」等）の内容充実や再編、「子育て支援」に関する教科目の検討

<対応案1>

○教科目名の変更

- ・「家庭支援論（講義2単位）」→「子ども家庭支援論（講義2単位）」

○教授内容の集約整理 ・ 子育て家庭の支援に必要な知識の基礎的な理解を促進するため、現行の教科目「相談援助」「保育相談支援」の教授内容のうち、保護者支援の基本となる事項（保育士としての基本姿勢や支援の内容など）について、現行の教科目「家庭支援論」の教授内容と統合し、新たな教科目「子ども家庭支援論」の教授内容として集約整理する。

- ・ なお、現行の教科目「家庭支援論」の教授内容のうち、「家庭の意義と機能」等については、新たな教科目「保育の心理学」（論点3（2）①関係）へ移行することにより、子ども及び保護者・家族・家庭の理解について、一体的に習得させる。

<対応案2>

○教科目の再編

- ・「相談援助（演習1単位）」「保育相談支援（演習1単位）」→「子育て支援（演習1単位）」

○教授内容の再編整理

- ・ 現行の教科目「相談援助」及び「保育相談支援」の教授内容のうち、保護者支援の基本的な事項については、新たな教科目「子ども家庭支援論」（論点4（1）①参照）に移行した上で、子育て支援の実践的な事項（相談援助における基本姿勢や方法論、援助の過程、事例検討など）については、新たな教科目「子育て支援」の教授内容として整理統合する。

論点5

保育士に係る現職研修の充実による資質・専門性の向上、他の専門職種との連携の必要性等を踏まえた、関連する教科目（「保育者論」等）の内容充実

<対応案>

○教授内容の充実

- ・ 現行の教科目「保育者論」の教授内容について、組織的な施設運営の下でキャリアアップの重要性や他の保育士等との協働などに関して理解を深めることができるよう、保育の質向上に向けた組織的な体制や取組に関する内容を含めて充実する。

平成 29 年度 第 23 回 F D フォーラム
「F D のこれまでと、これから ～多様な角度から F D について考える～」

報告：高桑 秀郎
樋口 健介

I 期 日

平成 29 年 3 月 3 日（土）・4 日（日）

II 会 場

京都府 京都産業大学 神山ホール サギタリス館 12 号館

III 本学参加者

教授 高桑秀郎 講師 樋口健介

IV 概要報告（分科会に関しては参加した会のみ記載）

1. シンポジウム 「F D のこれまでと、これから ～多様な角度から F D について考える～」

報告 樋口健介

○コーディネーター

西野 毅朗 氏（京都橘大学 教育開発支援センター 講師）

- ・この 10 年で F D の何が変わったのか。今後 10 年でどのようになっていくのか。授業改善から意味が拡張している。研究、社会参与、リーダーシップなど F D の概念が広がりを見せている。

○シンポジスト報告

①林 剛史 氏（文部科学省 高等教育局大学振興課 課長補佐）

「F D のこれまでと、これから ～政策的な観点から～」

- ・文部科学省の立場から F D の経緯、制度上の位置づけの説明がなされた。

●SD の導入と教職協働

→事務職員が教員と対等な立場での「教職協働」によって大学運営に参画することが重要であり、企画力・コミュニケーション力・語学力の向上、人事評価に応じた処遇、キャリアパスの構築などについてより組織的・計画的に実行していくことが求められる。

→実践例として、共愛国際大学、芝浦工業大学が挙げられた。

●今後の F D について

- ・三つのポリシーの下、どのように F D を機能させていくか。（量から質へ）
- ・実務家教員の拡大が見込まれる中、新規に大学教員として採用する実務家への F D
→高等教育、リカレント教育に対応する実務経験のある教員による科目の配置される。

- ・SD や教職協働と相まって、大学総体としての総合力をいかに高めていくか。
- ・大学における「働き方改革」とFD

②梅本 裕 氏（学校法人京都橘学園 理事長）

「これからのFDへの期待 体験的FD論」

●私が見てきた大学とFDの風景

- ・〈無駄と無秩序〉（昔の大学）と〈管理と効率〉（今の大学）の相克
- ・〈社会と学生の変化への対応〉と〈新たに生まれる改革課題〉の収容のつかなさ
- ・大学の社会的権威の源泉としての学位授与権の剥奪

→修士論文でさえ、「残念ながら合格」にしなければならない現状がある。

- ・学校教育法（第八三条）大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。

→「研究」の2文字は削除すべきでは？研究は別に保証すべきではないか。

- ・大学の管理と運営

→学長は同輩中の筆頭者（*primus inter pares*）からCEO（chief executive officer）へ。経営の比重が高くなる。

- ・私の期待する教員像

→学会最先端の研究論文を書く必要はない。

→読書を続けることは必須。

→レビュー論文が書ける頭の良さも必要。

→学会とのコンタクトは必要。

→目の前の学生を愛しいと思えるメンタリティー。

→学習者（学生）の実態や状況を理解できる。

→学生実態とかみ合う目的意識的な働きかけができる。

→教育的働きかけのための豊富な手立てを持っている。

→学習状況に関して様々なレベルで評価できる。

- ・FDへの期待

→学習者の実態把握・課題の析出

→目標の議論と把握

→カリキュラムと授業設計

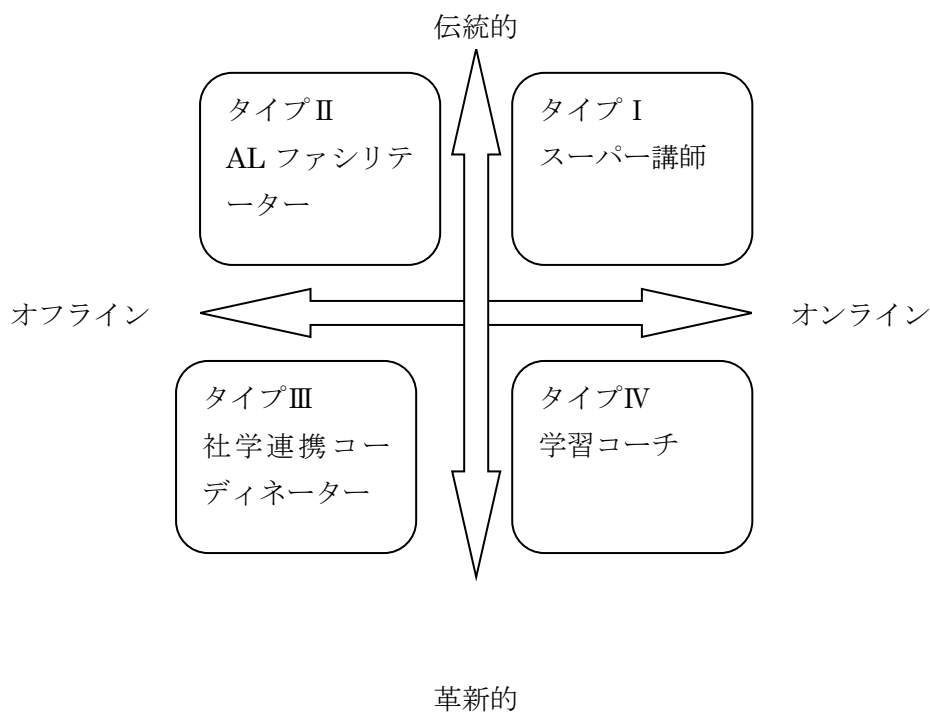
③佐藤 浩章 氏（大阪大学 全学教育推進機構 教育学習支援部 准教授）

「未来の大学教員・未来のFD —2030年に大学教員に求められる能力とその開発法の予測—」

- ・未来の仕事—大学教員は消えずに残るのか？—

→講義法というメソッドは代替可能性が高い。特に内容の標準化が可能な分野において。

・未来の大学教員—2030年に生き残る大学教員の4類型—



・未来のFD—大学教員に求められる能力の育成法

→研究・教育・社会参与・リーダーシップ（マネジメント）力といった複数の能力を開発する、という拡張されたFD概念の定義が一般化する。

→新任教員へのFD研修が必須化される。

④森 朋子 氏（関西大学 教育推進部 教授）

「FDのこれまでと、これから —学習研究の視点から—」

・学習研究とは、より効果的・効率的な人材育成を目的としてそれを可能とする現場における学習メカニズムの解明および応用。

・FDと学習研究

→FD=教員が変わる⇒学生の学びの質向上（間接的関与）

というよりはFD=学生の学びの質向上⇒教員が変わる（直接的関与）

学生の学びの質向上を目的に置く方が共有しやすいのではないか。

・教育開発センターでの取り組み（島根大学）の紹介

→学部を客観的な視点で分析し、授業改善、カリキュラム改善などを行う。

→アンケート分析を学部と共有し、初年次教育を強化。

→学部教員との丁寧なやり取りが必要であった。とても手間がかかる。

→専門スタッフ、人件費、担当者が異動で他大学へ移るとシステムが形骸化する。

・学習研究のメリット

→協働で課題を創出。学習改善に効果。学部とセンターとの良好な協働関係。データベース（エビデンスベース）で教員の意識も変わりやすい。

・学習研究のデメリット

→時間と手間がかかる。密接な関係が必須。センター側の人出不足。フェーディングによる学部の自立。

・これからのFDについて

→内部質保証システムの構築

→学修成果の可視化

→FDの実質化

→教育のブランディング

→担い手としてのSD（ポスドク、大学院生？）



◇以上の4件の報告後、パネルディスカッション、フロアディスカッションへと続いた。

報告 高桑秀郎

パネルディスカッション要旨

・異なる二つの風景（学びの場としての大学VS遊びの場としての大学）教員はどのようにふるまうべきか？

→どうしたらよいかは正直わからないが、教員として「授業でこれだけは伝えたい」を明確にし、投げかけて反応を見ていく。授業には学生の名前を憶えて臨むことが大事ではないか。

・学びの姿勢を持たない学生に対して

→そもそも主体的になるような仕組みになっていないのが日本の大学の現状。学習意欲の格差に対応するヒントの一つとしてアクティブラーニングによる意欲の引き上げがある。またクラスター分けした後の対応としては、一人一人への対応というのは難しいがグループ化しての指導が行える。また高大接続において大学とはこういう場であるということを伝えておくことも必要でないか。

・大学院生のプレFDについて・大学教員としての資格は？論文のみの審査で適切であるか？

→小中高と大学では仕組みが異なるので情報収集に着手している。免許制などの同じシステムはどうか？

→ヨーロッパなどでは研修を受ける。ただ国の法令に基づいて行っているところはない。大学が連携して研修を強化して大学教員としての質を保障する。全員に受けてもらうのが望ましい。

→誰に対して自分たちの営みをアカウントしていくか？それはやはり自分たちに対してである。教育業績を示す。論文でなく実務をどう評価するかが課題。

・FDにかかるコストについて、投資効果があるか？

→新任者研修については間違いなく効果があるが、長い目で見ていく必要がある。

・学習時間を延ばすにはどうすればよいか？

→学習時間という観点だけで評価を行うのは疑問。時間という量だけで考えるのは意味がない。何ができるようになったかという質が大事。

→学習時間だけで考えていくことは意味がない。目の前の学生の成長に何ができるかが大事。

→出口戦略でしかない。出ていく段階の評価に結びつかないと意味がない。学位授与の前に就職が決まってしまう現状で、これ以上を大学の教員に求めるのは無理があるのではないか。

・これからのFDについて

→FDの拡張、やることが増える中、システムをどう構築していくか。

→制度化していく中でFDは定着してきた。質を磨くことが大事。18歳人口が減る中で

必ず新しい問題が出てくる。

→研修だけでは対応できない。解決型のFDでここが努力する必要がある。

→学校が荒れるのは、教員が学生に対して「学生は出来ない」と思う時。教員が学生と向き合って「出来ないところもあるけれど、こんな良いところを持った学生たちなのです」と思えるようになると持ち直してくる。しっかり手をかけて、社会に対して「これが我々の成果です」と誇れるものを示すことが大事。

2. 分科会

(2)「第6分科会：体験・実践型学習におけるフィールドワークを通じた効果と運営上の課題」

報告 樋口健介

<概要>

近年、学生を地域社会に連れ出して教育活動を行う体系である「体験・実践型学習」を行う大学が増えてきている。このような学習は、学生にとって社会での課題を身近に知ることにつながり、その解決策を考えるのに役立つと言われている。

そこで「体験・実践型学習」によって成果をあげられている大学の事例を紹介して頂き、学生の理解度や意識が変わるにはどのように進めていけばいいかを検討する。

報告1：「課題解決型授業における学外者との交流に関する検討」

京都産業大学 現代社会学部 准教授 木原 麻子氏

京都産業大学における課題解決型授業（PBL）の取り組み授業が報告された。また課題解決型授業における学外者との交流という視点から検討が行われた。

○京都産業大学のPBL授業の概要

正式名称はO/O C F・P B L（オーシフ・ピービーエル）。2008年から開講している。共通科目（学部横断、通年集中、4単位）である。目的は汎用的課題解決能力の育成である。手法としては、学外団体（企業、自治体、NPOなど）との連携により、幅広く社会にある現在進行形の課題をチームで解決する。

○クラスとプロジェクトの概要例

受講生：20名

課題：「京都市北部に位置する花背地域の活性化プロジェクトを実行せよ」

そのために

- (1) 花背への移住を検討する人のための「花背ガイド」を作成せよ
- (2) 地域の空き地の改修を手伝いながら交流拠点として整備し、交流イベントを実施せよ

課題提供者「京都移住計画」

○授業の検討と考察

受講生に対して面接やアンケート調査を行い、授業で学生が身につけた能力などを検討した。

結果として以下の点が挙げられた。

- ・課題解決型授業において、学外者との交流の回数や時間が多くなれば、学外者との交流に対する心理的ハードルはかえって高くなる。
- ・過去の学外者との交流経験が有るからといって、課題解決型授業において積極的な学外者との交流につながるとは言えない。
- ・課題解決型授業の受講によって即、能力の自己評価が上がるわけではない。
- ・むしろ授業は自身の未熟さに気づく機会を提供していると考えられる。
- ・真面目に取り組んだ学生ほど（一旦）能力の自己評価が下がる可能性がある。
- ・再び自己評価が上がるためには「2 周目」の経験が必要となる可能性がある。（カリキュラムとして）
- ・ただし、「2 周目」に入る前に「1 周目」で得たものを認識、言語化できるような振り返りの機会が必要では？

報告 2：立命館大学政策学部における PBL：タイ・プロジェクト

立命館大学政策科学部 豊田 祐輔

立命館大学とタイのタマサート大学の国際共同ワークショップ、タイ・プロジェクトの取り組み事例とその評価と課題が報告された。

○評価についての課題

- ・評価のタイミングをいつにするのか（短期 vs 長期）
- ・評価手法をどうするか（主観的 vs 客観的、教員 vs 学生）
- ・教育の種類や参加者の属性など（教室 vs フィールドワーク、知り合い vs 初対面、日本人 vs 留学生）

○運営についての課題

- ・バラバラなテーマから絞っていく作業
- ・グループワークへの教員、TAの関与方策

○評価

- ・到達目標は問題を的確に発見し、合理的な解決方法を見出す能力を身に付けることである。
- ・プロジェクト報告書、授業出席、個人学習、グループワーク、フィールドワークをみることにより総合的に評価する。報告書には誰がどこを担当したのか明記させ個別に評価する。

→報告書の担当の明記は学生同士の気の使い合いであり機能していない。

報告3：「教育コンテンツとしての実践的デザインプログラム」

京都精華大学 葉山 勉 教授

京都精華大学でのPBLの取り組みとして、主に建築ゼミでの事例が報告された。

○教育的効果

1. 実体験としての知識習得・現実問題の理解
2. 社会でのコミュニケーションスキルの習得
3. 自己スケジュール管理と自己責任の理解
4. グループワーク活動の経験
5. クリエイティブな思考力と問題解決能力の習得

○PBLの実施における課題

1. 厳正な成績評価

グループへの評価と個人への評価／作業の量評価と成果品の質評価

→学生同士の相互評価を行うがうまく機能しない。(すべて良い評価をつけてしまう。)

→外部からの評価されることもあるが、軸がぶれる問題がある。

2. 参加学生のモチベーション維持と学生満足度

必修と選択／正規授業科目と自主活動

3. 知的財産権と業務報酬

知財としての個人のアイデアと組織でのアイデア／報酬の分配方法

→経費＝交通費＋材料費＋材料費

→協力機関との交渉（事前準備）が教員の主な仕事

4. 学内外との実施協力体制の構築と継続性

プログラムの準備・運営・発表・事業化・検証／学生・連携先の担当者の交代

→担当事務局が必要である。

→記録が重要である。

→教員、学生、連携先の担当者が異動などにより、プログラムが継続できなくなる。

5. 外部評価体制の構築と業界との関係

連携先評価と客観的評価／業界専門家への業務発注

→大学が受注することで結果的に地域の専門家の仕事を奪っていることになってしまうのでは？

○参加しての感想

大学が地域と連携し、PBL（Project-Based Learning）という授業の形を模索している事例がとても興味深かった。授業運営や評価など様々な点において検討する課題は多く、そもそも地域の課題を大学生が授業の中で解決することができるのか？しなければならぬのか？という疑問も上がった。

本学においては、各実習が一番大きな課題解決型授業である。また、子どもや高齢者

と実際にかかわる実践的な授業も含まれてくると考える。他大学でのPBLでの取り組みが参考になる点は、記録（日誌も含める）を含めた評価方法である。ルーブリックを活用した学生自身の自己評価、写真や映像を用いたポートフォリオ、学生による相互評価など検討できる点であるとする。課題解決型授業（実践的な授業）における学生の学びの可視化のための方策、可能な限り客観的な評価が本学の学びの質の向上と保証に繋がる可能性を感じた。

（２）「第8分科会：大学の「出口」とは何だろうか —教養・シチズンシップ・キャリア・人間教育—

報告 高桑秀郎

<概要>

大学における教養教育、シチズンアップ教育、キャリア教育、人間教育など、それぞれが想定する大学の「出口」とはいったい何だろうか。大学の先には何がある、もしくはあるべきだと考えられているか。3名の報告から高等教育の「出口」について検討し、現代社会における大学教育と教員の役割を再考したい。

○コーディネーター

藤田 義孝氏（大谷大学 文学部国際文化学科 准教授）

○報告者

①安彦 忠彦氏（神奈川大学 特別招聘教授(元中央教育審議会委員)）

- ・安彦氏が体調を崩し、欠席のため、あらかじめ提出されていたレジюмеを基にコーディネーターの藤田氏が、内容について解説することとなった。

「大学で身に付けるべき「教養」は何か」

- ・出口から見える大学教育の姿

→以前は大学入学志願者の割合が全高校卒業者の数に比べて低く、志願者の学力も高かった。しかし、現在の大学進学志願者の割合が全高校卒業者の61%を占め、「普通」レベルのものが多く入学してくるようになった。18歳人口の減少と高等教育機関の定員増により、「入口」で成績優秀者の選抜が難しくなってきた。定員確保のため、全入状態の大学もあり、「入口」で学生の学力の質の担保はできない。それがゆえに大学の「教育」と「出口」での評価を重視すべき。

- ・「出口」＝卒業時の姿をどう描くか

→大きく3つに分けるカリキュラムポリシーとの関係。①一般教養：一般的な「教養」がどのように身についているか。（手段・客体）②専門教養：自分の専門専攻での専門的能力はどの程度のものか。（手段・客体）③人格性（主体性・自立心・多様性・道徳性など）＝その成熟度はどの程度のものか。（目的・主体）「出口」では校風や伝統、自主的な部活動など「潜在的カリキュラム」の部分を含めて考える必要がある。これ

らは「一般教養」や「人格性」に関係する。

- ・安彦氏がどのようにこれらを考えているか、その著書から読み取る
- 国立教育政策研究所が示す「21世紀型能力」として①基礎力：言語スキル、数量スキル、情報スキル ②思考力：問題解決・発見力・想像力、論理的・批判的思考力、メタ認知・適応的学習力 ③実践力：自律的活動力、社会参画力、持続可能な未来への責任 が挙げられる。安彦氏は「21世紀型能力」を示しても「教育目標」としては不完全であり、そのみではなく「望ましい人格」をも示さなければならないとしている。「能力」の行使にブレーキをかけるような「人格」的要素も重要な意味を持つ。目指すべき「子どもの姿」としては「能力」と「人格」の関係は逆になるべきで、「人格」が「能力」をその一部として内に含む全体を構成し、後者を「何のために用いるのかを決める」ものとして最重視し、上からそれを支配する性格のものとして位置付ける必要がある。そのようにして初めて「人格の完成」が教育目的に掲げられる独自の意味が明確になる。
- R. バーネットによるコンピテンシー（能力育成）批判。コンピテンスによる教育は教育者の理念が消えている。それは権力によって課されたものである。高等教育はコンピテンスのための教育ではなく、学生たちの人生のための教育でなければならない。
- 「人格」は主体・目的であり、「能力」は客体・手段である。能力学力は手段視できるが、人間人格を決して何かのあるいは誰かの手段視してはならない。「人格形成」は「主体形成」であり、「学力形成」は「手段形成」に過ぎない、つまり学力は人格が使う手段に過ぎず、いくら手段を優れたものにしても、それを使う主体・人格が優れていなければ、社会的には正しく生かされない。
- ・発表者の問題提起
- 大学自治やアカデミズムの独立・自立性が標榜されていたのは社会に対する批判機能を担保するためという側面があったはずではなかったか？学生自身が社会を批判し、社会に抵抗し、これを改変する力こそが主体として生きるに必要な力なのではないか？18歳の学生は入学時からすでに自立した主体である「成人」とみなすべきではないか？本来、キャリア教育、シチズンシップ教育は高校卒業までに終えているべきでは？「製造物責任」のように学生＝客体とみなすことは妥当か？大学や教育機関の責任論は学生を客体としか見ていないのでは？説明責任とは主として学生に対するものでは？グローバリスト・ビジネス社会だけが「社会」なのか？
- ・おわりに
- 「事実としての教育」の目的は「自立」にある。その達成が見逃されている状況を変える必要がある。「出口」での「自立」の姿を、各大学が仮説的にでも示し、対外的かつ教員・学生にも示してその実現に努める。それは「自発性」（自分の考えでやりだしたことは何か）、周囲の他者に対する「配慮」（感謝や問題意識）、「責任意識」（やり始めたことに対する自他への責任ある対応）などである。「体験目標」と「達成目標」を

区別し、それを明示すること。

②児玉 英明氏（滋賀大学 高大接続・入試センター 特任准教授）

協力者：沢田雄平氏（京都府立大学 生命環境学部 学生）

「教養教育が想定する大学の「出口」ーリベラルアーツ・ゼミナール「社会科学の学び方」のコンセプトー」

・キャリア教育と教養教育は根本が異なる

→教養教育は、時代の移り変わりとともに必要・不要論で振り子のように揺れる。なぜそのようなことが起きるかを考えることが大事。現在のキャリア教育においては、社会の常識の指導の下に企業側にとって都合のよい「企業の論理」が主導で動いている節もあるのではないか。ブラック企業に対し、言いなりにならず、誤っていることに気付き、それをきちんと主張できる感性を身に付けさせることが大事である。

・教養教育の原理像の再確認

→教養教育が想定する大学の出口とは、「民主的社会」とその豊かな展開を担う「民主的市民の形成」である。「民主的市民の形成」という目標は、時代は変わっても不変の教養教育の原理像であるにもかかわらず、再確認しなくてはならないのは、近年、「新しい教育」と称して教養教育の意義と役割を矮小化したものが出てきているからである。教養教育の本質を、実用的な汎用的技能の修得と捉え、その成果測定に重きを置く議論の始まりから、「民主的市民の形成」という教養教育の目標が衰退し、学習成果の測定という大学評価の文脈が前面に出てきている。

・民主主義の後退局面を察知するセンス

→近年、民主主義は後退していると感じる。政治性を極力排除した社会科教育を受けてきたものは、民主主義が後退してきても、それに気づく社会科学的な感性を持ち合わせていない。「今の日本はみつともなくなった」といえるようなセンスを育てることが教養教育。教養教育科目として、社会科学を教えるのであれば、民主主義が後退している局面で、それを察知する社会科学的センスの養成に重きを置くかどうかである。吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」が執筆された時代背景と現在は似てきている状況でないか。今再びこの著書が注目されているのには理由がある。主人公コペル君の悩みや吉永小百合の映画「母べえ」のシーンを例に、自らの思考を放棄していくことの問題を提起。時代の思潮に流されず、真つ当な感覚で主張する著者の勇気と論理は今の時代だからこそ正しく伝承されるべきではないか。

・多様性を尊重した対話の姿勢を育む自由な気風

→教養教育が目標とする民主的社会とは、多様な考え方が尊重され、他者との間に闊達な議論が生まれ、それによって自由な気風が保たれている社会である。それらを実現するには自分の考え方や立場を絶対視しない「他者感覚」と「対話」が求められる。しかし、学力偏差値の高い大学・学部の学生の特徴として私立の中高一貫校出身の学

生が多く、同質性が高い。異質な人とかかわる経験がないと不寛容な人間になる。学校とは多様な価値観、多様性を身に付ける場でもある。個人の能力を高める、汎用的技能を身に付けることとは別次元のコンピテンシーである。社会の現実や人々の生き方が内包している矛盾に対して学生を向き合わせ、「世の中とはそういうもの」で終わらせずに、なぜそうなっているかを徹底的に学生に考えさせることが必要である。

・学生立場からの報告（児玉先生の授業を履修していた沢田君の報告）

→自分は働いてから大学に入った人間で、大学の教育にある種の理想（自分を変えられる何かを求めて）を抱いて入ってきた。ところが、専門の教育を中心に大学の授業、特に専門の授業は处世術、実用的な How to の話を中心に、人格を高めるようなものがなかった。学生が失敗経験なく、無傷で社会に出ていくことが是であるか疑問であった。そんな時にめぐりあったのが先生の授業で、とても楽しかった。先生の授業では教員と学生の対話があり、教員が自己開示しているので、学生も徐々に心開いて開放されていく。そうした教員や学生相互の本音で語れるやり取りが良かった。もちろん处世術としての専門は必要である。一方で人格を高めるための教養教育も必要で、この二本の柱が欲しい。

③山下 憲昭氏（大谷大学 文学部社会学科 教授）

「福祉の担い手不足の現実 社会福祉士・介護福祉士養成校の実情と課題」

・超高齢社会と福祉の担い手不足

→平成 29 年の敬老の日に発表された日本の高齢化率は 27.7%。平成 26 年度末に介護保険制度における要介護、要支援の認定を受けた人は 591.8 万人。第 1 号被保険者の 17.9%、介護保険施設入所者は平成 28 年 10 月で約 96 万人。あとは介護予防、居宅介護、グループホームなどで生活している。今後も人口の高齢化は進んでいくので、介護職に就く介護人材の確保が必須課題であるのに介護人材不足は深刻。同様に保育士も不足しており、児童福祉施設、障害児・者施設でも人材確保が困難になっている。介護人材の確保の状況は 2025 年に 253 万人の介護人材が必要であるのに対し、現在の供給予測が 215 万人でこのままでは 37.7 万人の人材不足が生じる。

・京都府下の介護人材の現状と課題・行政の取り組み

→京都府における介護職の離職率は 13.6%と全国平均(16.7%)や全産業の離職率(15.0%)と比べても低い。にもかかわらず、現場の人材不足感は 77.0%で、平成 29 年 3 月の求人倍率は全産業が 1.45 であるのに対し、介護関連は 3.10 である。行政の取り組みとしては京都府福祉人材・研修センターの設置や京都ジョブセンター内に福祉人材カフェを開設し、求人求職のマッチングや、求職者支援としてカウンセリング、セミナーや施設見学会を実施している。福祉業界のイメージアップを図るため、上位認証法人を規範とする「職場環境モデル」を設定、職場の環境改善、職員の処遇改善を実施している。特に府北部での人材不足が深刻なので、てこ入れを図っている。北部地域は施

設の職員不足が深刻で、養成校も少ない。北部出身者が地元に戻らないなどの課題があり、処遇改善、求人活動、実習生の受け入れや養成校との懇談会などを開催し、養成校との連携を強めるなどを行っている。

・社会福祉士・介護福祉士養成校の様子と福祉専門職養成の課題

→2000年前後に介護保険制度を踏まえ養成校が急増、しかしここ数年、社会福祉系学部・学科・専門学校への入学者が激減。高校での進路指導で福祉系への勧奨が少なくなったことや企業就職が好調で福祉への関心が薄れてきていること、福祉職のイメージダウンと学生の志向の変化などが原因と考えられる。利用対象者への想像力・共感力を育むことが人とのつながりを生み、そのことが幸せにつながることを知る必要がある。現場体験を通じて、現場を知るだけでなく、利用者への支援によりその方の思いを叶えるというゴールを知ってほしい。アクション先行型活動への参加を促すことで学生一人一人の意欲、問題意識、理論学習の意欲向上へつなげる。

福祉職の就職状況としては社会学科 14 名に対し、他学科 20 名である。他学科からの福祉職への就職は、宗教教育及び副専攻として福祉関連科目を受講している学生の様子を反映していることから、人間教育としては成功しているのではないかと。

◇ディスカッション・総括コメント

・学生を主体としてとらえているか？

→自発的な学習というのは教員にとって都合のよい姿である。主体性というのは親や先生、社会に対して状況に応じて、自らの意見を言い、戦うことができるのが主体性。

・現在のキャリア教育での問題は？

→キャリア教育を進めている人たちには見落とししたり、抜け落ちたりした部分があると感じている。ブラック企業などブラックな部分をブラックだと異議を申し立てられるような感覚を育てるのが教養教育。

・他者多様性について

→課題を課題として認識できなければ、多様性は成り立たない。哲学的命題としては「どう生きるか」である。自分と異なる意見を持つ人については言い負かすということを行っても、通じる相手と通じない相手がいる。一つの型にすっきりはまるわけではないので見極めることが大事。

・大学教育の中で行うべきこととして

→労働者の権利とかの教育をしっかり行うべき。企業（雇用）側に都合の良い人材を育てるのではなく、卒業しても不当なことに対して、自らの権利を主張できるようにしていくこと。

○参加しての感想

「自立」した人間を育むことについて、就職による経済的な自立よりも、一個人として

自分の考えをしっかりと持ち、意見として交わすことのできる知的な自立、精神的な自立の重要性を感じた。本学でも幼児教育や介護についてマニュアル的に方法論の修得のみでは不十分であることは訴えているが、多くの学生が何を学ぶかより単位の習得や資格の取得に満足する傾向があると思われるので、自ら課題を持つことの重要性を訴えていきたいと感じた。

平成 29 年度教員個人目標に対する自己評価

役 職	学長・教授	教員名	<u>渡邊 洋一</u>
－授業としての取り組み目標－			
授業では、その回の目標を明示し、振り返りで確認する作業を重ねて、徐々にでも教育目標に近づいている（学習の成果がある）ことがわかるようにしたい。			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
個々の授業では、冒頭にその回の目標を提示し、配布資料にも明記することで、何を学んだのか明確にできる手ごたえがあった。しかしながら、後期は実習等で中断することが多く、全体として連続性・まとまりを欠いた。		15 回の授業をいくつかのテーマごとにまとめてブロックとしているが、そのまとまりの意味を把握できるよう、授業相互の連関についてまとめ、ブロックごとに評価とフィードバックを重ねてみようと考えている。	
－学生とのかかわりとしての目標－			
学生個人々人を理解する努力を重ね、責任を持って主体的に行動するよう働きかける。			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
連続して学生と接する機会がなく、顔と名前を一致させることのできる学生が限られてしまった。		学生個人ごとの手持ちカードを作るのが有効だったので、さらに活用して学生の把握に努めたい。	

役 職	教授	教員名	<u>大木 みどり</u>
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・今年度も新体育館の適切で有効な使い方については、授業や各部活動の使用も含め検討していく。 ・実際の保育・教育活動場面をイメージした取り組みとしてのグループ演習課題の内容や進め方について検討していく。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・体育館については、授業の他サークル活動、学内行事などで有効に活用されている。しかし活動中に壁面を損傷し報告まで時間がかかったこともあり、今後もこの施設設備を活かした安全で有効な使用方法について検討していく。 ・グループ演習活動については、実習の振り 		<ul style="list-style-type: none"> ・体育館や用具の使用等については体育授業時や様々な機会をとらえながら、繰り返し安全で丁寧な使用について指導していく。 ・活動内容については、十分に共通理解や協力できるような丁寧な説明やグループ毎の打ち合わせ時間の確保など、授業時 	

<p>返りを行いながら実際の保育場面を意識したものを目指したが、グループ間に差が見られる結果となった。</p>	<p>間内・外の学習のバランスを取りながら進める。</p>
<p>－学生とのかかわりとしての目標－</p>	
<p>・クラス、授業、ゼミ、部活動等、今年度も学生への積極的で丁寧な関わりを心がけ、活動を共にしながら学生自身が活動の主体であることを意識し活動に取り組むことができるような関わりや援助の仕方についても工夫していく。</p>	
<p>今年度の反省</p>	<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>
<p>・各生徒は授業・クラス活動・ゼミ・部活動等様々な場面で関わる機会を多く得ることができた。</p> <p>・様々なクラス活動や行事、サークル活動や委員会活動等において、担当学生や中心学生は積極的に活動に参加し勧めてくれたが、それ以外の学生の協力を得ることが難しい場面も見られことが課題である。</p>	<p>・学生が気軽に研究室を訪問したり、相談したりできるような環境を整え、学生個人への丁寧な関わりと共に、様々なクラス活動や行事、サークル活動や委員会活動等が協力的にまた円滑に行われるように、連絡を密にしながら随時相談に乗るなど支援していく。</p>

役 職	専攻科主任・教授	教員名	<u>荒木 隆俊</u>
<p>－授業としての取り組み目標－</p>			
<p>・学生が持っている介護イメージを的確に把握した授業を心がける。</p> <p>・国家試験合格を意識した授業を徹底する。</p>			
<p>今年度の反省</p>		<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>	
<p>・介護福祉士国家試験対策と連動して、各場面の対応(支援)イメージを連想させながら授業を進めた。その結果、個人差が大きく出たと思われる。個々の介護実習に取り組む姿勢や日頃の学習の姿勢が影響したようである。</p> <p>・国家試験を意識したあまり、授業が予備校化した感が強い。本来身につけなければならない求められる介護福祉士像の視点を、もう少し意識して取り組むべきだった。</p>		<p>・実習に対して、個々の学生の上記用に応じて、目的意識や視点を的確にアドバイスできる体制が必要である。そのために、これまで以上に教員間の情報交換を密にしていく。</p> <p>・一年課程の特色を活かした授業を心がける。</p>	
<p>－学生とのかかわりとしての目標－</p>			

<ul style="list-style-type: none"> ・今年度も個々の学生との「対話」を意識した関わりを継続していく。 ・できるだけ多く、個々の学生の良いところを見つける努力をしていく。 	
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・「対話」は心がけた。 ・良いところを見つける努力は足らなかった気がする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「対話」を基本に、仕事にはゆとりを持って取り組む。 ・学生から話しかけられたら、丁寧に話を聞く努力をする。こちらから一方的に話すのではなく、学生に十分話させる姿勢を心がける。

役職	学科長・教授	教員名	<u>柏倉 弘和</u>
－授業としての取り組み目標－			
<p>学習者の興味・関心を十分に活かして授業の内容・方法を考えることにより、学びの成立を図るとともに、学びに対する意識の変容の突破口を探りたい。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>学習者が、教材や学習内容に興味・関心を感じる授業が少しずつ増えたように思う。具体的な活動を伴う学習への意欲は比較的高いが、講義に対する意識をもっと改善していきたい。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き興味・関心を喚起する教材を工夫していく。 ・授業内容をできるだけ実践と関連させていく。 ・学習者が主体となって考え、計画し、実践する授業をさらに改善し、増やしていく。 	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<p>授業やゼミ以外でも、昼休みや放課後、行事のときなどいろいろな場面で、なるべく多くの学生と会話することを心がけ、コミュニケーションを図っていきたい。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>学生の皆さんとのかかわりは十分ではなかった。かかわる機会をもっと見つけていきたい。</p>		<p>授業やゼミ、実習指導などを通してのかかわりはもちろんだが、それ以外でもサークル等、スポーツや音楽、映画などを通じたかかわりも持てるようにしていく。</p>	

役 職	教授	教員名	<u>高橋 寛</u>
－授業としての取り組み目標－			
<p>教員の言葉、歌声、ピアノの演奏などのアナログな「耳からの情報」に注意を向けさせ、「聴き取る、書き取る、記憶に残す」という作業を必要とするような教材を増やし、そのような授業の進め方を充実させる。これを指向することは、強化以外の学生指導という側面にも有効であるはずだ。本学の卒業生たちの就職先から『ピアノをもっと弾けるようになってきて欲しい』との意見が多く寄せられている昨今、ピアノの授業のあり方についても、担当の教員たちと協議して新たな指導方法を早急に確立する必要があると感じている。「歌うだけ」「ピアノを弾くだけ」のスキルでは、幼児教育の現場では適応できない。スキル・アップすることの喜びを実感できる授業の実施に努める。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>授業の展開にマンネリ化の気配が忍び寄る感が否めない。新たな内容の検討が必要かもしれないと思っている。</p> <p>ピアノの授業の内容については、担当教員たちが改善に向けて検討してくれたようだ。</p>		<p>自身の内的充実を更に図る。併せて新たな授業内容の模索を心掛ける。</p> <p>今後も「歌って踊ってピアノも弾ける幼児教育者」の養成に努める。</p>	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<p>教員の言葉、歌声、ピアノの演奏などのアナログな「耳からの情報」に注意を向けさせ、「聴き取る、書き取る、記憶に残す」という作業を必要とするような教材を増やし、そのような授業の進め方を充実させる。これを指向することは、強化以外の学生指導という側面にも有効であるはずだ。本学の卒業生たちの就職先から『ピアノをもっと弾けるようになってきて欲しい』との意見が多く寄せられている昨今、ピアノの授業のあり方についても、担当の教員たちと協議して新たな指導方法を早急に確立する必要があると感じている。「歌うだけ」「ピアノを弾くだけ」のスキルでは、幼児教育の現場では適応できない。スキル・アップすることの喜びを実感できる授業の実施に努める。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>クラス担任を担当せず、時間に余裕があったため、ゼミの学生とはゆっくりと関わられたと思う。</p>		<p>時間配分に注意して、社会人としての礼節を確保しつつ関わりたい。</p>	

役 職	教授	教員名	<u>高桑 秀郎</u>
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・講義系は授業として学習にふさわしい環境を整え、学生に理解を求める。 ・実技系は積極的に活動できる雰囲気作りに励む。また事故が発生しないよう安全管理に配慮する。 			

今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・授業中の私語に対しては、度々注意を行ったので、ある程度環境は整えられたのではないかと感じている。一方、遅刻して入室した学生に対応すると授業が一旦中断される形になる。かと言ってそのまま座らねば、資料等の配布がないままの受講になるので思案のしどころである。 ・大きな事故等なく、意欲的な活動が行えたのではないと思う。出席点呼の返事については慣れてくると学生の態度が隣の人と話し込んでいたり、小さな挙手だけによる反応しか示さない学生も見られたりしたので、その都度注意を行ったが、どの程度理解してもらっているかは疑問である。 ・2年次の学生には出席の重要性を説いたが、出席率に反映しない学生も見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遅刻の学生に対する全学的な対応や共通認識が必要と感じる。基本は授業受講の際のルールとして、学生に理解を求めるよう訴える。 ・担任団にもなっているので、2年次の学年全体として、担任団を中心に欠席、遅刻を減らすよう働きかけていきたい。
<p>－学生とのかかわりとしての目標－</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・学生の話をよく聞くようにする。 ・研究室の整理整頓。 ・指導の際、専門職の能力として何が問題になるかを学生に考えてもらえるよう訴えてみる。 	
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・学生指導の場面でこちらからの言い分を先に行ってしまう場面が度々あった。もう少し学生の言い分を言えるよう配慮したい。 ・授業、実習指導、卒業研究の指導が混んでくる時期から研究室のテーブルの上が煩雑になってしまった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上手くいっている部分は慢心せずに、丁寧にやっていく。 ・「有無を言わず」のスタンスにならないよう、落ち着いて指導できるよう心がける。 ・ファイルの有効活用を心がける。

役 職	学生部長・教授	教員名	<u>松田 知明</u>
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の理解を確認することを心がけて、その結果を配布資料の改善などすぐに反映できるようにしたい。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業後レポート等で確認し、次回口頭で説明するようにした。しかし、配布資料の改善は十分とはいえなかった。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 来年度から、授業後のフィードバックを実施することから、その方法も含めながら検討していきたい。 	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 子ども子育て新制度の実施や保育者不足などで就職状況が変化していることから、就職活動等が円滑に進むように情報を提供するなど、学生とのコミュニケーションを深め、適切な支援ができるようにしたい。 ・ 学生会として、学生がけじめある生活ができるよう指導の重点目標を立て、指導することから、それらの指導が効果的に行われるようにしたい。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 就職活動等が円滑に進むように情報を提供するなど、学生とのコミュニケーションを深め、支援ができた。 ・ 学生会として、学生がけじめある生活ができるよう指導の重点目標を立て、指導することとしたが、その効果を十分確認できなかった。 ・ 今春卒業生の中に、就職後職場に適応できないものが見られた。在学中の支援方法について検討したい。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 職場へ速やかに適応できるような支援をしたい。 ・ 学生指導の重点目標が達成できるよう、努力したい。 	

役 職	准教授	教員名	<u>小林 浩子</u>
－授業としての取り組み目標－			
<p>英語（外国語）は、自力で辞書等を使って試行錯誤するなかで、日本語にはない英語特有の思考方法や文化的・歴史的背景にまでふれることができる科目なので、安易に翻訳機等の他力を使い日本語訳結果だけを得て良しとするのではなく、地道に辞書を使って訳し、さらにより日本語的な言い回しに翻訳することを学生に課していきたい。</p>			

今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
授業時間中の英文の日本語訳について、学生各自で辞書をひき日本語訳をするという作業については、おおむねよくできていたと思われる。	今年度も引き続き、学生自らが辞書を使って英文を訳し（まずは直訳でも可）、さらにそれを自然な日本語に直す、という二段階にわけた英語訳指導をし、異言語は文化や思考方法の違いから、そのまま日本語直訳はできないことを体験させていきたい。また今年も英語の授業時間は紙の辞書か電子辞書使用のみとして、スマホ辞書は使用しないよう、授業開始時に学生に伝えるようにしたい。

－学生とのかかわりとしての目標－

今なぜそれをするのか、今なぜそれをしてはいけないのか…英語の授業に限らず、他の授業や学生生活にも共通することだが、威圧的に禁止するのではなく、学生がその理由を理解でき、行動に移せるような指導方法を考えて実施したい。

今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
他学生が発表時の私語禁止については、ほぼ守られており、私語があった場合でもその学生達になぜ私語禁止なのかの意味を話すとすぐ止めた。単に叱るのではなく、その意味するところを教えることが大切だと再認識した。	他学生が発表する時に私語がやまない場合、授業クラス全体に私語をやめるよう注意するだけでなく、私語をやめない学生のそばに行って注意する等、積極的な働きかけを試みたい。

役職	准教授	教員名	松田 水月
－授業としての取り組み目標－			
<p>少子高齢化についての、現在の社会状況を見据え、保育・介護現場での医療的分野を主に置き、それらの情報を取り入れ学生に還元していく。国家試験合格はもちろん、常に目標を持ち、学生自身の興味関心に繋がるよう授業に心がけ、自分の介護観や保育観につながるような働きかけを行っていく。</p>			

今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<p>少子高齢化などの社会情勢を踏まえながら講義に取り組んだ。しかし、噛み砕いて説明したつもりでいても、どこまで伝わっているかには疑問が残る。また、やはり国家試験については、他教員とも綿密に打ち合わせを行い対策を進めていったが、介護福祉士として今後どう考え職業人として何を考えなければいけないかではなく、国家試験のための授業になってしまった部分が多くあったことは課題である。</p>	<p>・社会情勢に合わせた情報を取り入れ、授業を構成していくことは継続していく。1年課程ということで、国家試験対策ばかりに比重を置きやすい状況であったが。介護福祉士とは何か、養成校で資格を取るとは社会でどういったことが求められるのかなど、介護福祉士の原点についてもっと重点を置いていく。</p>
<p>－学生とのかかわりとしての目標－</p>	
<p>次年度は、社会人として生きていくことについて常に意識させた学生と関わりを行い、個人の特徴を良い方向へ伸ばせるよう工夫していきたい。</p>	
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<p>適宜、学生と社会人との違いや、今を生きることの重要性、また、先を見据えながら日々過ごすことを対話をしながら話せた1年であったと思う。</p>	<p>自分では、社会人としてなどを話したつもりで入るが、聞き入っているようで伝わっていなかったりした学生も複数みられるので、今後はより個人指導が必要なのではないかと考える。</p>

役職	准教授	教員名	太田 裕子
<p>－授業としての取り組み目標－</p>			
<p>・学習内容の保育における重要性を極力具体的に示すことで、学習内容自体の理解、保育との繋がりへの理解が促進されるようにする。</p> <p>・授業内容の理解状況をはじめとする学生の現状を授業に反映させるとともに、提出物への個別対応も心がける。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>・学習内容の理解については一定の定着ができたように思うが、保育との繋がりへの理解を明確に促進することは難しかったと感じている。</p> <p>・授業態度、提出物の内容から、学生の現状を把握し授業のスピードや内容を微調整しながら年間の授業を行うことはできたよう</p>		<p>・学習内容を理解した上で保育との関連性を理解することは難しいことだが、具体的な事例提示等により、保育との繋がりへの理解を進めたい。</p> <p>・講義形式の授業では学生が受け身になる傾向が強いことから、学生の提出物に対して助言等を書き込み返却する等の個別</p>	

に思う。半面継続的な個別コメント記述は難しかった。	対応は必要なものとの認識が依然として強い。年間を通しての実施は難しい面もあるが、極力実現していきたい。
－学生とのかかわりとしての目標－	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生生活や人間関係に対する不安、進路に関する心配等が軽減されるよう、極力時間を確保して、学生各々の気持ちに対する共感、受容を大切にして対応していきたい。 	
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・ 個性に合わせた関わり方は常時課題となることであり、完璧に満足のいく関わりだったとはいえないが、学生生活における不安に共感する等して、可能な限りの努力はしたと思う。希望の進路決定、実現の支援も行えたように思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 時間の捻出には難しい面もあるが、個別な関わり的重要性、有効性は大きいと実感していることから、引き続き、できる限り細やかな関わりを心がけていきたい。積極的な学生、消極的な学生など様々な学生がいることを念頭に置き、それぞれの学生との距離の取り方を考慮しながら関わっていきたい。

役 職	准教授	教員名	<u>花田 嘉雄</u>
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生個々の良い点や個性的な発想を見つけたら、その場で褒めるように心掛ける。色々な表現や価値観を受け入れ、また、他の作品にも興味を持てるように、鑑賞や発表の方法を工夫する。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 今年度は、図画工作の壁面制作の発表時に教員（自分）がコメントするだけでなく、他学生の感想も入れるようにした。違う視点からの意見、感想を聞くことができ、学生間だけでなく自分にとっても参考になったので、今後も続けていきたい。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 他学生からの感想や意見を聞く場面、機会を増やすようにする。 	

－学生とのかかわりとしての目標－	
<ul style="list-style-type: none"> ・時と場合、人間関係によって言葉を遣い分けるよう声掛けする。また、自分自身の言葉遣いについても、気楽過ぎないように気をつける。 ・頃合いを見ながら、学生が自ら考え、意識を高められるような働きかけをする。 	
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・言動については、自分自身の言動も含めて今年度も反省点の多い内容であった。日頃から少しでも意識するようにしたい。 ・クラスの活動については、ほぼ学生に任せているが、その方が上手くいくように思う。学生に任せられることは任せ、ポイントを絞った関わりができると思い思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の言動が気楽すぎないように、日頃から少しでも意識するように心がける。特に2年生、専攻科学生に対しては、時と場合、人間関係によって言葉を遣い分けるように声掛けする。 ・クラス運営については、できるだけ学生に任せるようにし、その分褒めるようにしたい。

役職	講師	教員名	大関 嘉成
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・現象を専門的視点をもって視られるようになるよう、小レポート・テストの間の質を変えることで、そのトレーニングを行いかつ測定をする。 ・授業内容をできるだけ学生の問題と関連付けることを継続する。 ・若干の不具合が生じるよう仕向け、学生自身にその解決を試行させることを継続し、問題解決能力を高める。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・専門科目においては、毎時のリアクションペーパーに加え、複数のワークシート（レポート）を実施することで、当該授業の復習や分野を繋ぐまとめができるよう努めた。以前より設定していた、専門用語を実際の現象を例に出しながら説明する課題に関しては概ね遂行できていたことから、その理解も概ね出来ていたのではないかと考えられるが、提示した現象を専門用語を使 		<ul style="list-style-type: none"> ・とある現象を専門用語を用いて解説したり、分析的視点をもって視られたりするようになるためには、まず、専門用語や知的な枠組みをある程度網羅的に理解していることが必要かもしれない。また、複数の事例を専門用語等と関連付けて把握していることも必要だろう。学生自身、実習等で何らかの経験を得た場合、土着的に帰納し、つまり経験則をつくり上げ 	

<p>って説明する課題に回答することは困難であった。</p>	<p>ている様子である。そこで、専門用語等の提示に合わせ紹介する事例をさらに増やし、学生にもアウトプットさせることでその理解を促すことに努め、同時に、日常や実習場面で遭遇した現象を専門用語等に帰納できる構えを身に着けさせるよう努めたい。</p>
<p>－学生とのかかわりとしての目標－</p>	
<p>・自身・学生共にスマートフォンのアプリに関する情報交換やその理解に努め、積極的に活用し、自立・自律に繋げることを継続したい。特に、スマートフォン上のコミュニケーションにおける学生の姿にも注視し、現実世界のコミュニケーションの充実に繋げられるよう支援したい。</p>	
<p>今年度の反省</p>	<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>
<p>・LINEでのコミュニケーションのスタイル、instagram 利用のスタイル、特にストーリーやDMの些細な利用法に関して知ることができた。課外活動等のスマートフォンを使える状況においては、動画をストーリーにあげることは日常のようであった。飲食店情報や記念日等の共有という点では便利そうであったが、プライバシーの点やテキストコミュニケーションのあり方を考えると疑問を抱く場面が多々あり、またそれらは潜伏していることからリアルコミュニケーションに繋ぐことは困難であった。</p>	<p>・自身が入っているLINEグループ等のコミュニティにおける内容は把握できても、それ以外に関して依然として潜伏しており、また、そこに教員を含む場合と含まない場合ではそのコミュニケーションも質を異にしているようである。学生が不必要なトラブルを生じさせたり、それに見舞われたりしないように、アプリのスタンスや使い方を教員自身理解し、ツールとしての扱い方を模索していきたい。</p> <p>・今年度、授業における提出物の期限を従来の3段階から2段階に減らし、かつそれを早めに学生に伝えるよう努めた。また、その提出物も細分化した。次年度も継続し、最終期限より早目に課題にとりかかれるようになる姿勢を身に着けさせたい。</p>

役 職	講師	教員名	<u>樋口 健介</u>
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 図画工作（一年次）については、継続してものづくりが楽しいと思える授業を目指していく。作品集（スケッチブック）が大切にとっておきたくなるものになるようにしたい。 ・ 図画工作Ⅱ（二年次）については、選択した学生に合わせて内容を考えていく。造形活動を楽しみ、それをコミュニケーションへ活用する視点が持てるようにしたい。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 図画工作（一年次）については、15回目に行った保育案を妄想する課題は面白かった。スケッチブックに自己評価を書き込むことも検討してみたい。 ・ 図画工作Ⅱ（二年次）については、授業自体は楽しく行っているが、授業が記録として残っていないため、振り返りが行えていない。制作過程や作品を学生自身がポートフォリオのような形でまとめていけるような手段を考えていきたい。 ・ 保育実践研究Ⅱでは、高齢者施設での活動の記録に保育のドキュメンテーションを活用した。学生は面白く記録できたようであったが、記録の焦点を絞り、改善案が考えやすい記録方法を考えていきたい。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ スケッチブックが保育案を考えたときの参考になるようにしたい。それぞれの活動で保育活動へ展開するための視点を学生自身が考えられるような働きかけを行う。 ・ 制作過程や作品を学生自身がポートフォリオのような形でまとめていけるような手段を考えていきたい。 ・ 焦点を絞り、改善案が考えやすい記録方法を考えていきたい。 	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分と学生のかかわりが少しでも学生の学びや自主性につながるように日常的に心がける。 ・ 学生が様々な学外の人と関われる機会を作っていきたい。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学外での取り組みに参加する学生を集めるのが難しくなっている。授業の中で学外の人と関われる機会ができると課外活動の意欲も上がるのかもしれないと考える。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 余裕を持って学生と関われるように、仕事を計画的に整理して行きたい。 	

役 職	講師	教員名	<u>宮地 康子</u>
－授業としての取り組み目標－			
<p>いよいよ国家試験が始まるため、授業だけの学習ではなく、早い時期から自己学習ができるように学習習慣をつけさせたい。</p> <p>そのために、授業前後の学習にも力を入れていく。授業後に課題を出し、自己学習し復習することを徹底させていく。</p> <p>知識が増えることで、学習意欲の向上に繋がり、少しずつ楽しみをもって取り組むことができるように配慮していく。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>国家試験対策が初年度であったが、試行錯誤しながら 28 名全員が受験することができた。</p> <p>1 年を通し、学習段階に合わせ、授業や課題で用いるものを参考書の選択等、教員間で話し合いをもちながら学習を進めていった。自己学習の習慣は早期から身につけることが難しかったが、後半では自主的に学習する姿や授業に集中している学生が多くなり、指導の効果はみられた。しかし、個人差が大きく、個別に指導が必要な学生にはその都度指導をしていたが、最終的な目標点までにはいたらず、今後の課題となった。</p>		<p>入学前に実施した過去問の課題を用いて、春休み中の学習の方法を確認し、4 月からの自己学習へと繋がるような指導を行っていく。</p> <p>学習方法に悩んでいる学生に対しては、早期に声をかけ、早めに自己学習できるように促していく。</p> <p>また、個別に指導が必要な学生に対しては特にコミュニケーションを心がけ、学習意欲に結びつけることができるようにする。</p>	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<p>今年は、授業や実習の他に国家試験の対策が入り、学生自身の体調や精神面で不安定となりやすいのではないかと思う。よって、学生の状態を把握できるようにコミュニケーションをはかり、信頼関係が築けるよう努力する。</p> <p>来年度より社会人となるという自覚を持つためにも、学生生活の中で主体的に考え行動できるような働きかけをしていきたい。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>欠席や遅刻が目立つ学生には、個別に指導し、話をした後すぐは遅刻なく登校できるものの、時間が経つと再度遅刻や欠席がみられるようになる学生おり、指導内容の見直しが必要と思われた。</p> <p>良い部分は評価し、直すべき部分は答えを</p>		<p>学生一人ひとりとのコミュニケーションを大事にし、学生の生活や健康状態、精神状態等を把握するように心がける。</p> <p>生活態度については、全体に早い段階から声をかけるようにし、さらに個別に対応が必要な学生に対しては、粘り強く指</p>	

こちらから伝えるのではなく、どうすればよいと思うか学生自身が考えるように促すという指導が難しく来年度の課題とする。	導していきたい。 また、国家試験に向けてクラス全体で目標を達成できるように、クラス運営にも力を入れていきたい。
---	--

役 職	講師	教員名	<u>伊藤 和雄</u>
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 演習形式科目、講義形式科目の土台となる授業計画を作成する。 ・ 科目コマ毎の学習の理解度をはかる方法を振り返りシートや発表の機会を設ける。 ・ 専攻科においては介護福祉士国家試験受験対策を視野にいれた授業を展開する。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・ きめ細かな形式毎の授業計画を作成することができなかった。 ・ 学習の理解度をはかる発表の機会を設ける事が不十分であった。 ・ 専攻科において、介護福祉士国家試験対策を重要視しすぎたきらいがあり、授業が予備校化してしまった。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 演習形式科目、講義形式科目の土台となる授業計画を作成する。 ・ ふり返しシートや発表の機会を設ける。 ・ 予備校化しないように意識する。 	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生が今現在、何に悩み、どのようなアドバイスを求めているのかを意識しコミュニケーションを図るようにする。 ・ 社会人として、専門職人として何が大事かを考える、意識できる、理解できるように関わる。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の状況に合わせたコミュニケーションをとることが不十分であった。 ・ 委員会活動、学生各自が責任を自覚するまでには至らなかった。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 各学生がどのような悩みをもっているか、他学生、教職員から積極的に情報収集をする。 ・ 報連相が身につくような関わり方をする。 	

役 職	講師	教員名	<u>白崎 直季</u>
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・楽器を弾くことに対しての苦手意識を減らしていけるような働きかけをする。 ・自信を持って表現していけるよう褒めることを心がけ、そのような授業の方向性を担当の教員間で共有する。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・楽器を弾くことに対しての苦手意識は個人差が非常に大きいように感じたが、前期から比べると克服している学生の姿も見られた。 ・いいねカードを使い、学生間で演奏の良かった点を褒め合うことを実施することができたが、年間を通して継続することができなかった。 		<ul style="list-style-type: none"> ・楽器に対しての苦手意識を減らしていくには、前期の最初の方の授業が大切であると感じたため、楽しく楽器に触れるだけではなく、楽譜の読み方なども緻密に教えていく。 ・ほめることの重要性を学生にも伝え、継続して行っていけるような環境を整える。 	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・クラス担任をするにあたり、クラス全体の雰囲気がよく、学生が楽しく学習できるような環境を作っていく。 ・特定の学生だけでなく、バランスよく多くの学生とコミュニケーションをはかるようにする。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・クラスにおいては誰一人ドロップすることなく1年を終えることができて安心した。 ・これまでは研究室に来る学生とのコミュニケーションの方が多かったが、今年度はたくさん学生の学生と話をすることができたように感じる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・クラスが卒業を迎える学年であるため、より丁寧な学生指導をしていく。クラスが良い雰囲気でも学習できるような環境を作ることは継続していく。 ・挨拶は基本のコミュニケーションであるため、まずはこちらから学生に明るく挨拶をしていくことを心掛ける。 	

平成29年度 卒業時満足度調査

() は昨年度の値

問①				問②				問③						
答	人数	%		答	人数	%		答	人数	%				
短大の施設、設備、備品の充実度について	非常に満足	31	23.5% (21.1%)	短大の施設、設備、備品の使いやすさについて	非常に満足	36	27.3% (22.8%)	短大の授業、教育課程全般について	非常に満足	49	37.1% (36.6%)			
	やや満足	78	59.1% (55.3%)		やや満足	77	58.3% (59.3%)		やや満足	79	59.8% (61.8%)			
	やや不満	22	16.7% (23.6%)		やや不満	18	13.6% (17.9%)		やや不満	4	3.0% (1.6%)			
	全く不満	1	0.8% (0.0%)		全く不満	1	1% (0.0%)		全く不満	0	0% (0.0%)			
平均	3.05 (2.68)	(無回答)	0	0%	平均	3.12 (2.81)	(無回答)	0	0%	平均	3.34 (3.20)	(無回答)	0	0%
問④				問⑤				問⑥						
答	人数	%		答	人数	%		答	人数	%				
専任教員の授業について	非常に満足	64	48.5% (52.0%)	非常勤教員の授業について	非常に満足	37	28.0% (34.1%)	ゼミ活動とゼミ指導教員の指導について	非常に満足	74	56.1% (56.9%)			
	やや満足	67	50.8% (44.7%)		やや満足	75	56.8% (53.7%)		やや満足	54	40.9% (39.0%)			
	やや不満	1	1% (3.3%)		やや不満	20	15.2% (12.2%)		やや不満	3	2.3% (3.3%)			
	全く不満	0	0% (0%)		全く不満	0	0% (0.0%)		全く不満	1	0.8% (0.0%)			
平均	3.48 (3.37)	(無回答)	0	0%	平均	3.13 (3.09)	(無回答)	0	0%	平均	3.52 (3.47)	(無回答)	0	0%
問⑦				問⑧				問⑨						
答	人数	%		答	人数	%		答	人数	%				
クラス担任の指導について	非常に満足	96	72.7% (50.4%)	事務室職員の対応全般について	非常に満足	85	64.4% (53.7%)	学校行事について	非常に満足	43	32.6% (44.7%)			
	やや満足	34	25.8% (43.1%)		やや満足	45	34.1% (42.3%)		やや満足	75	56.8% (51.2%)			
	やや不満	2	1.5% (5.7%)		やや不満	2	2% (4.1%)		やや不満	14	10.6% (4.1%)			
	全く不満	0	0.0% (0.8%)		全く不満	0	0% (0%)		全く不満	0	0.0% (0.0%)			
平均	3.71 (3.16)	(無回答)	0	0%	平均	3.63 (3.36)	(無回答)	0	0%	平均	3.22 (3.32)	(無回答)	0	0%
問⑩				問⑪				問⑫						
答	人数	%		答	人数	%		答	人数	%				
授業以外の課外活動について	非常に満足	49	37.1% (41.5%)	自分の専門職としての技能の向上について	非常に満足	55	41.7% (39.8%)	2年間（もしくは3年間）の自分の過ごし方や成長について	非常に満足	59	44.7% (44.7%)			
	やや満足	78	59.1% (54.5%)		やや満足	74	56.1% (52.8%)		やや満足	70	53.0% (48.0%)			
	やや不満	5	3.8% (3.3%)		やや不満	3	2.3% (6.5%)		やや不満	3	2.3% (7.3%)			
	全く不満	0	0.0% (0.0%)		全く不満	0	0% (0.0%)		全く不満	0	0% (0.0%)			
平均	3.33 (3.22)	(無回答)	0	0%	平均	3.39 (3.24)	(無回答)	0	0%	平均	3.42 (3.29)	(無回答)	0	0%
問⑬				問⑭				問⑮						
答	人数	%		答	人数	%		答	人数	%				
友人たちとの出会いについて	非常に満足	81	61.4% (70.7%)	教員との授業以外での関わりについて	非常に満足	79	59.8% (61.0%)	事務職員との関わりについて	非常に満足	60	45.5% (51.2%)			
	やや満足	46	34.8% (29.3%)		やや満足	51	38.6% (35.8%)		やや満足	67	50.8% (45.5%)			
	やや不満	5	3.8% (0.0%)		やや不満	1	1% (3.3%)		やや不満	4	3.0% (3.3%)			
	全く不満	0	0.0% (0.6%)		全く不満	0	0% (0%)		全く不満	0	0% (0.0%)			
平均	3.58 (3.61)	(無回答)	0	0%	平均	3.60 (3.47)	(無回答)	1	1% (0.0%)	平均	3.43 (3.24)	(無回答)	1	1% (0%)
問⑯				問⑰				問⑱						
答	人数	%		答	人数	%		答	人数	%				
就職活動への支援について	非常に満足	81	61.4% (51.2%)	トラブルを抱えた際の教職員の緊急時の対応について	非常に満足	73	55.3% (54.5%)	学生生活全般について	非常に満足	72	54.5% (50.4%)			
	やや満足	47	35.6% (43.9%)		やや満足	56	42.4% (42.3%)		やや満足	56	42.4% (47.2%)			
	やや不満	3	2% (4.9%)		やや不満	2	1.5% (3.3%)		やや不満	2	1.5% (1.6%)			
	全く不満	0	0% (0.0%)		全く不満	0	0% (0.0%)		全く不満	0	0% (0.0%)			
平均	3.60 (3.34)	(無回答)	1	0.8% (0.0%)	平均	3.54 (3.32)	(無回答)	1	1% (0%)	平均	3.54 (3.36)	(無回答)	2	2% (1%)
問⑲				問⑳				問㉑						
答	人数	%		答	人数	%		区間	人数	%				
日常を過ごす環境としての短大について	非常に満足	70	53.0% (48.0%)	羽陽学園短期大学に入学したこと自体を今、どう感じているか	非常に満足	86	65.2% (65.0%)	自身の学生生活を点数化すると100点満点で何点か？	90～100	64	50.8% (56.0%)			
	やや満足	57	43.2% (48.0%)		やや満足	42	31.8% (33.3%)		80～89	27	21.4% (19.8%)			
	やや不満	4	3.0% (3.3%)		やや不満	3	2% (1.6%)		70～79	15	11.9% (13.8%)			
	全く不満	0	0% (0.8%)		全く不満	0	0% (0.0%)		60～69	11	8.7% (6.9%)			
平均	3.50 (3.31)	(無回答)	1	0.8% (0%)	平均	3.63 (3.55)	(無回答)	1	1% (0%)	平均	84.6 N=112, SD=0.61 (86.5)	～59	2	1.6% (3.4%)

※平均は「非常に満足」を「4」、「やや満足」を「3」、「やや不満」を「2」、「全く不満」を「1」として算出。なお、20項目の平均値：3.40。

調査は2018年3月14日、各クラスの担任教員により実施された。（協力者：132名）

作成 学内FD担当(2018/03/14)

○卒業時満足度調査 自由記述

◇羽陽短大で特に評価したい点	◇学校側にもっと努力や改善を求める点
<p>優しい方ばかり！！</p> <p>楽しかったです。とっても良かったです。</p> <p>先生との距離も近く、とても充実した学生生活だった。</p> <p>楽しく過ごせた。</p> <p>先生が良い点。</p> <p>先生との距離。程よい距離感。</p> <p>先生方がいつも親身になって話を聞いてくださる。優しく暖かい先生ばかり。</p> <p>事務の方々にとても助けられた3年間でした。書類など自分では分かりにくいものも、皆さんで確認して下さったり、丁寧に教えていただいたりとても助けていただきました。</p> <p>先生たちが親身になって相談にのってくれるところ。</p> <p>先生や、事務の人がすごく優しくて、アットホームのところ。</p> <p>生徒同士の中もよいところ。</p> <p>大きく成長できた。</p> <p>行事がたくさんあり、クラスの団結力が高まり良く、仲良くなりやすい。</p> <p>心身ともに成長できる場所であった。</p> <p>みんなフレンドリー。</p> <p>先生と生徒の距離が近いので良い。</p> <p>寮がとても住みやすかった。</p> <p>授業が楽しい。</p> <p>パンを昼に売りに来ること。</p> <p>頼れる先生が多いこと！</p> <p>実習に活用できる本が多くあったり、教員からのアドバイスを多くいただける場所。</p> <p>卒業後も関りができ、家族のようになれる。</p> <p>先生がすごくいい。</p> <p>学生ホールがとても楽しく、休める場でもあった。</p> <p>人との関りが近く、優しい人には恵まれた。</p> <p>先生と生徒の距離が近い。</p> <p>先生がどんな時でも、生徒を守ってくれる。</p> <p>しっかりと一人一人にあわせて指導してくれる。</p>	<p>ATM、コンビニがない。2</p> <p>冬になると寒い。学校の中が寒い！6</p> <p>施設、設備、備品の充実度。(暖房、清掃、学食など)3</p> <p>寮が遠い。2</p> <p>ゴミがたまる、学校が汚い、清潔な教育環境であって欲しい。5</p> <p>食堂、購買、売店が欲しい。おにぎり、カップラーメンを売ってほしい。7</p> <p>体育館が狭い。</p> <p>体育館でできることの少なさ、グラウンドが無いことでできることが少ない。</p> <p>授業中なのにうるさい。</p> <p>メリハリがない。</p> <p>行事の時に動く人(委員会)が決まっている。</p> <p>クラスの中で、誰かがやってくれるからいいやって人が多い。</p> <p>一人でも昼ごはんを食べたりできる場所が欲しい。</p> <p>教員が中心で活動している様子が学校行事で見受けられる。高校とあまり変わらないと思う。(行事への参加が自由でもよいと思う。)</p> <p>授業は大いに学びになるが、独りよがりの授業では分かりにくく、学びにくいと思う。</p> <p>非常勤の先生</p> <p>トイレをもっときれいにしてほしい。</p> <p>トイレの異臭。</p> <p>サニタリー箱(汚物入れ)にフタが必要。</p> <p>授業に遅刻した生徒にもっと厳しくあたってもよいと思う。</p> <p>Wi-Fiを付けてほしい。2</p> <p>学生ホールとか、もう少し休めるところが欲しい。</p> <p>非常勤の授業方法(一部トラウマになりました)。</p> <p>机に空いている穴を何とかしてほしい。</p> <p>クラスアピールの時期を変えてほしい。</p> <p>ピアノを現場で活かせるような指導方法を考慮し、練習の時から子どもを想定し、周りの学生に歌ってもらえるような授業を増やしてほしい。</p>

○卒業時満足度調査 自由記述

◇羽陽短大で特に評価したい点	◇学校側にもっと努力や改善を求める点
<p>学生と教師の仲が良い、相談しやすい。</p> <p>皆が優しい。</p> <p>アットホームな雰囲気なところ。</p> <p>学生が生活できるようなスペースが充実している。</p> <p>先生方がとても頼りになる。</p> <p>先生方に相談するとすごい親身になって相談にのってくれ、助かった。</p> <p>教員と生徒の関り。</p> <p>とてもユーモアがあり、楽しかった。</p> <p>先生との距離が近いところ。</p> <p>クラブが楽しかった。</p> <p>先生方が優しくかったです。</p> <p>相談しやすい。</p> <p>楽しく学べる。</p> <p>先生が優しい。</p> <p>先生が温かい。</p> <p>雰囲気が良い。</p> <p>満足です。</p> <p>先生が全員優しくて、一人一人のことを見ていてくれる。</p> <p>みんなと協力して、助け合いながら勉強できる。</p> <p>先生方みんな穏やかで優しい。</p> <p>なんだか居心地が良いんだな～～</p> <p>第二の家のような場所でした。</p> <p>先生たち、友達の温かさ。</p> <p>過ごしやすさ。</p> <p>先生に質問がしやすく、いろいろとアドバイスをしてもらえる。</p> <p>先生が熱心に支援してくださる点。</p> <p>ピアノの指導が分かりやすかった。ピアノの設備。</p> <p>先生方の距離が近くて、楽しかった。</p> <p>設備がよい。</p> <p>演習が豊富だった。</p>	

1年次 学習成果等アンケート集計結果

平成29年12月実施

【1】あなたが本学への入学を決定された理由を強い順に3つ下記から選んでマークしてください。

	第一理由	第二理由	第三理由
1. 建学の理念に共感したから	0	2	2
2. 入試科目があっていたから	0	0	3
3. 自分の学力にあっていたから	4	1	4
4. 学びたい学部・学科・コースがあったから	43	18	10
5. カリキュラムが充実しているから	4	3	7
6. 資格を取得出来るから	25	40	12
7. 就職に役立つから	5	9	14
8. キャンパスの施設・設備が良いから	3	2	7
9. 地元の大学だから	3	9	21
10. 大学の知名度が高かったから	0	1	1
11. 大学が設置されている地域に魅力があるから	0	0	0
12. 学費が安いから	0	1	0
13. 親や教員に勧められたから	4	4	11
14. 本学しか合格しなかったから	0	1	0
15. その他	1	1	0

「第一理由」「第二理由」「第三理由」それぞれの回答数を集計し、「第一理由」回答数に「3点」、「第二理由」回答数に「2点」、「第三理由」回答数に「1点」をかけた上で合計し、その合計点の上位3位。

第一理由	第二理由	第三理由
4	6	9

【2】本学の授業に関する以下の項目について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそう ある 4	どちらとも 言えない 3	あまりそうと は言えない 2	いいえ 1		
(1) 興味もてる授業が多い	16	59	16	1	0	92	3.98
(2) ためになる授業が多い	37	44	11	0	0	92	4.28
(3) わかりやすい授業が多い	7	46	36	3	0	92	3.62
(4) 主体的に考え行動する授業が多い	5	36	46	4	1	92	3.43
(5) 就職に役立ちそうな授業が多い	45	38	8	1	0	92	4.38
(6) 国際性を培うことができる授業が多い	5	12	40	27	8	92	2.77
(7) 授業が良くなるよう工夫をしている教員が多い	10	38	40	3	1	92	3.58
(8) 授業や学生指導に対して熱心な教員が多い	24	46	18	3	1	92	3.97

【3】授業を受けて、あなたは下記の知識や能力を身につけることができましたか。該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそう ある 4	どちらとも 言えない 3	あまりそうと は言えない 2	いいえ 1		
(1) 幅広い教養	18	58	14	2	0	92	4.00
(2) 専門知識や技能	36	50	6	0	0	92	4.33
(3) 課題解決能力(課題を発見し、解決する力)	6	56	26	4	0	92	3.70
(4) 物事を批判的に捉え思考する力	6	33	47	5	1	92	3.41
(5) 情報機器を使いこなす能力	1	20	40	22	9	92	2.80
(6) 外国語を運用する能力	1	9	36	33	13	92	2.48
(7) コミュニケーション能力(議論・発表・協働する力)	23	44	21	3	1	92	3.92
(8) リーダーシップをとる力	5	31	44	10	2	92	3.29

【4】本学の改善に向けて今後取り組むべき事項について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそう ある 4	どちらとも 言えない 3	あまりそうと は言えない 2	いいえ 1		
(1) カリキュラムを改善する	2	22	50	9	9	92	2.99
(2) 教員の授業力を向上する	4	36	36	14	2	92	3.28
(3) コミュニケーション能力の向上を重視した教育を充実する	3	31	41	13	4	92	3.17
(4) 学習相談等、学習を支援する体制を充実する	11	26	35	14	6	92	3.24
(5) 学生生活を支援する体制を充実する	11	32	32	11	6	92	3.34
(6) 就職に役立つ授業を充実する	18	34	24	10	6	92	3.52
(7) 地域社会との関わりを重視する	9	33	37	9	4	92	3.37
(8) 施設や設備を充実する	28	33	24	5	2	92	3.87

【5】この一年間において、授業の予習・復習時間は1日につき平均何時間ですか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

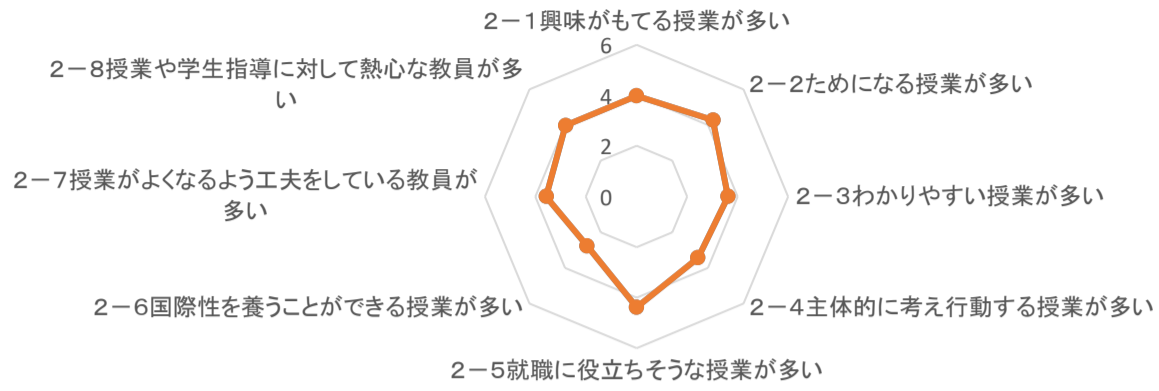
回答内容(点数)	3時間以上 5	2時間以上 3時間未満 4	1時間以上 2時間未満 3	30分以上 1時間未満 2	30分未満 1	回答者計	平均値
		0	2	18	22		

【6】あなたは、本学に入学して良かったと思いますか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

回答内容(点数)	はい 5	まあそう ある 4	どちらとも 言えない 3	あまりそうと は言えない 2	いいえ 1	回答者計	平均値
		0	2	7	38		

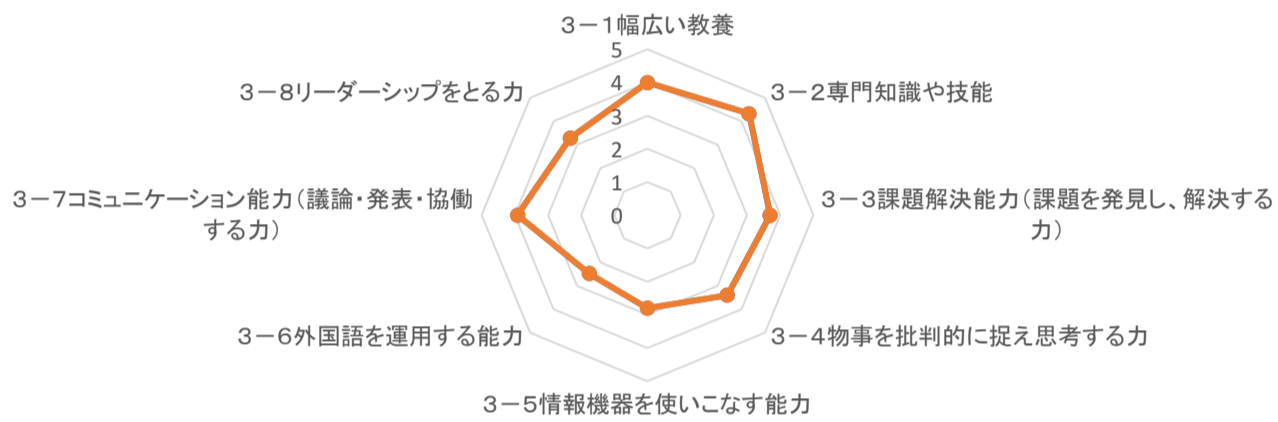
【2】授業について

● 全体平均 ● 大学平均



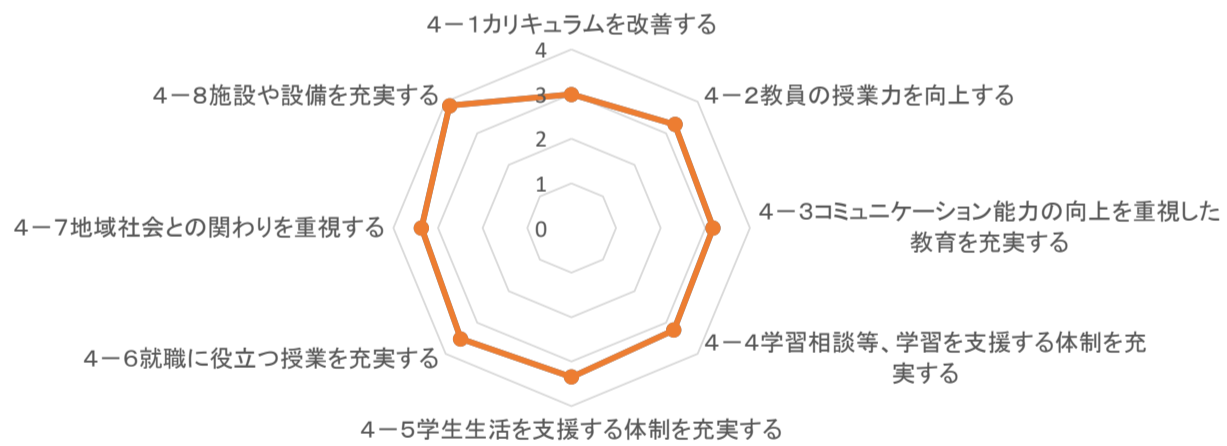
【3】授業を受けて身についた知識・能力について

● 全体平均 ● 大学平均



【4】改善に向けて取り組むべき事項について

● 平均 ● 大学平均



2年次 学習成果等アンケート集計結果

平成29年12月実施

【1】あなたが本学への入学を決定された理由を強い順に3つ下記から選んでマークしてください。

	第一理由	第二理由	第三理由
1. 建学の理念に共感したから	4	0	2
2. 入試科目があっていたから	0	1	0
3. 自分の学力にあっていたから	2	2	3
4. 学びたい学部・学科・コースがあったから	48	18	12
5. カリキュラムが充実しているから	1	2	10
6. 資格を取得出来るから	23	49	16
7. 就職に役立つから	11	11	20
8. キャンパスの施設・設備が良いから	0	1	5
9. 地元の大学だから	5	6	13
10. 大学の知名度が高かったから	0	1	1
11. 大学が設置されている地域に魅力があるから	0	0	3
12. 学費が安いから	0	0	1
13. 親や教員に勧められたから	4	6	11
14. 本学しか合格しなかったから	1	1	0
15. その他	2	0	1

「第一理由」「第二理由」「第三理由」それぞれの回答数を集計し、「第一理由」回答数に「3点」、「第二理由」回答数に「2点」、「第三理由」回答数に「1点」をかけた上で合計し、その合計点の上位3位。

第一理由	第二理由	第三理由
4	6	7

【2】本学の授業に関する以下の項目について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい	まあそうである	どちらとも言えない	あまりそうとは言えない	いいえ		
(1) 興味もてる授業が多い	36	50	13	2	0	101	4.19
(2) ためになる授業が多い	50	44	7	0	0	101	4.43
(3) わかりやすい授業が多い	26	46	27	2	0	101	3.95
(4) 主体的に考え行動する授業が多い	26	44	28	2	1	101	3.91
(5) 就職に役立ちそうな授業が多い	64	32	5	0	0	101	4.58
(6) 国際性を培うことができる授業が多い	8	17	44	19	13	101	2.88
(7) 授業が良くなるよう工夫をしている教員が多い	24	43	30	2	2	101	3.84
(8) 授業や学生指導に対して熱心な教員が多い	36	40	24	1	0	101	4.10

【3】授業を受けて、あなたは下記の知識や能力を身につけることができましたか。該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい	まあそうである	どちらとも言えない	あまりそうとは言えない	いいえ		
(1) 幅広い教養	40	39	22	0	0	101	4.18
(2) 専門知識や技能	54	41	6	0	0	101	4.48
(3) 課題解決能力(課題を発見し、解決する力)	25	50	24	2	0	101	3.97
(4) 物事を批判的に捉え思考する力	20	44	32	3	2	101	3.76
(5) 情報機器を使いこなす能力	22	44	31	4	0	101	3.83
(6) 外国語を運用する能力	6	15	31	35	14	101	2.64
(7) コミュニケーション能力(議論・発表・協働する力)	25	43	29	4	0	101	3.88
(8) リーダーシップをとる力	16	29	42	13	1	101	3.46

【4】本学の改善に向けて今後取り組むべき事項について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい	まあそうである	どちらとも言えない	あまりそうとは言えない	いいえ		
(1) カリキュラムを改善する	7	22	48	17	7	101	3.05
(2) 教員の授業力を向上する	10	30	36	16	9	101	3.16
(3) コミュニケーション能力の向上を重視した教育を充実する	9	35	39	11	7	101	3.28
(4) 学習相談等、学習を支援する体制を充実する	10	26	52	4	8	100	3.26
(5) 学生生活を支援する体制を充実する	16	31	43	7	4	101	3.48
(6) 就職に役立つ授業を充実する	19	35	35	6	6	101	3.54
(7) 地域社会との関わりを重視する	11	33	45	8	4	101	3.39
(8) 施設や設備を充実する	42	27	24	5	3	101	3.99

【5】この一年間において、授業の予習・復習時間は1日につき平均何時間ですか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	3時間以上	2時間以上3時間未満	1時間以上2時間未満	30分以上1時間未満	30分未満		
	5	4	3	2	1		
	1	3	17	36	44	101	1.82

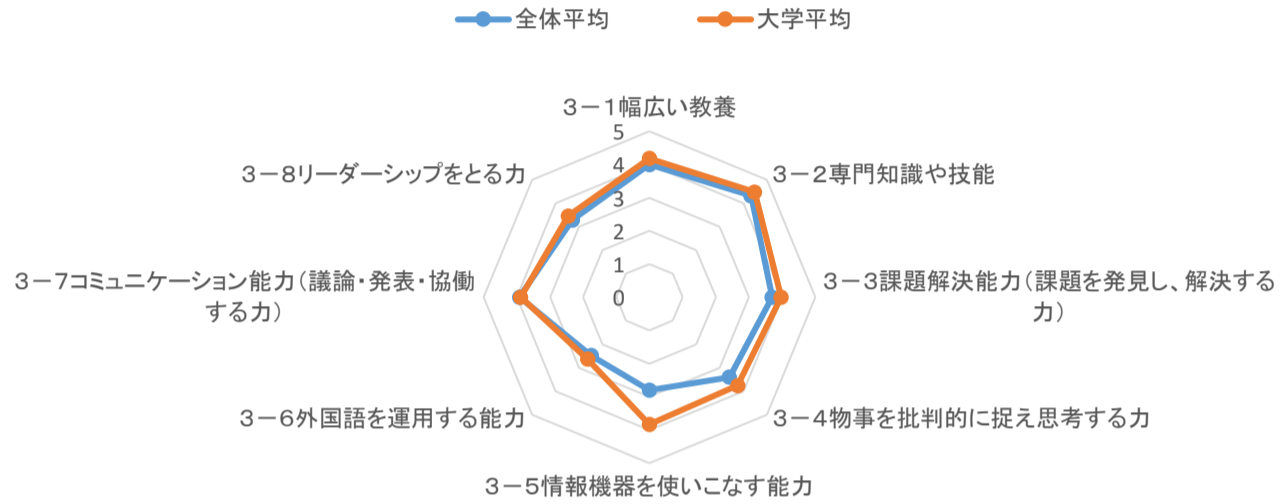
【6】あなたは、本学に入学して良かったと思いますか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい	まあそうである	どちらとも言えない	あまりそうとは言えない	いいえ		
	5	4	3	2	1		
	0	2	8	26	65	101	1.48

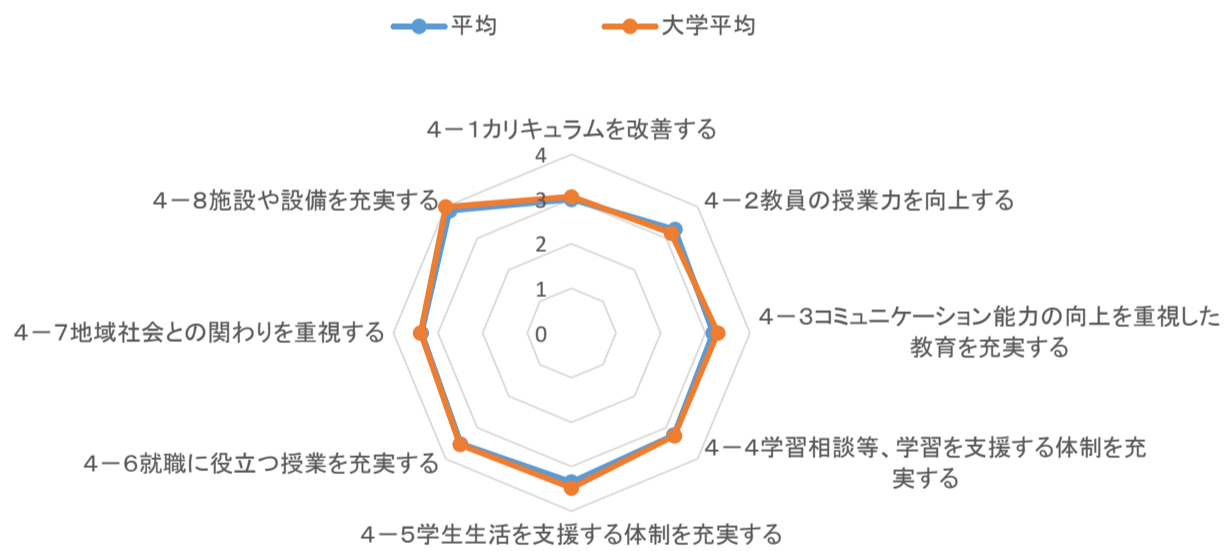
【2】授業について



【3】授業を受けて身についた知識・能力について



【4】改善に向けて取り組むべき事項について



専攻科 学習成果等アンケート集計結果

平成29年12月実施

【1】あなたが本学への入学を決定された理由を強い順に3つ下記から選んでマークしてください。

	第一理由	第二理由	第三理由
1. 建学の理念に共感したから	1	0	0
2. 入試科目があっていたから	0	1	0
3. 自分の学力にあっていたから	0	0	2
4. 学びたい学部・学科・コースがあったから	13	2	3
5. カリキュラムが充実しているから	0	2	0
6. 資格を取得出来るから	6	14	2
7. 就職に役立つから	1	2	7
8. キャンパスの施設・設備が良いから	0	1	3
9. 地元の大学だから	1	3	6
10. 大学の知名度が高かったから	0	0	0
11. 大学が設置されている地域に魅力があるから	0	0	0
12. 学費が安いから	0	0	0
13. 親や教員に勧められたから	3	1	3
14. 本学しか合格しなかったから	1	0	0
15. その他	0	0	0

「第一理由」「第二理由」「第三理由」それぞれの回答数を集計し、「第一理由」回答数に「3点」、「第二理由」回答数に「2点」、「第三理由」回答数に「1点」をかけた上で合計し、その合計点の上位3位。

第一理由	第二理由	第三理由
6	4	9

【2】本学の授業に関する以下の項目について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1		
(1) 興味もてる授業が多い	10	15	1	0	0	26	4.35
(2) ためになる授業が多い	15	10	1	0	0	26	4.54
(3) わかりやすい授業が多い	7	14	5	0	0	26	4.08
(4) 主体的に考え行動する授業が多い	6	14	6	0	0	26	4.00
(5) 就職に役立つ授業が多い	16	9	1	0	0	26	4.58
(6) 国際性を培うことができる授業が多い	3	9	6	6	2	26	3.19
(7) 授業が良くなるよう工夫をしている教員が多い	9	13	4	0	0	26	4.19
(8) 授業や学生指導に対して熱心な教員が多い	12	11	3	0	0	26	4.35

【3】授業を受けて、あなたは下記の知識や能力を身につけることができましたか。該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1		
(1) 幅広い教養	13	11	2	0	0	26	4.42
(2) 専門知識や技能	13	12	1	0	0	26	4.46
(3) 課題解決能力(課題を発見し、解決する力)	9	14	3	0	0	26	4.23
(4) 物事を批判的に捉え思考する力	7	13	5	0	1	26	3.96
(5) 情報機器を使いこなす能力	6	11	9	0	0	26	3.88
(6) 外国語を運用する能力	1	5	9	6	5	26	2.65
(7) コミュニケーション能力(議論・発表・協働する力)	10	10	6	0	0	26	4.15
(8) リーダーシップをとる力	6	11	9	0	0	26	3.88

【4】本学の改善に向けて今後取り組むべき事項について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1		
(1) カリキュラムを改善する	0	7	13	3	3	26	2.92
(2) 教員の授業力を向上する	0	7	12	6	1	26	2.96
(3) コミュニケーション能力の向上を重視した教育を充実する	2	9	10	4	1	26	3.27
(4) 学習相談等、学習を支援する体制を充実する	1	10	11	2	2	26	3.23
(5) 学生生活を支援する体制を充実する	2	10	10	2	2	26	3.31
(6) 就職に役立つ授業を充実する	2	12	7	3	2	26	3.35
(7) 地域社会との関わりを重視する	2	11	8	4	1	26	3.35
(8) 施設や設備を充実する	7	10	6	2	1	26	3.77

【5】この一年間において、授業の予習・復習時間は1日につき平均何時間ですか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

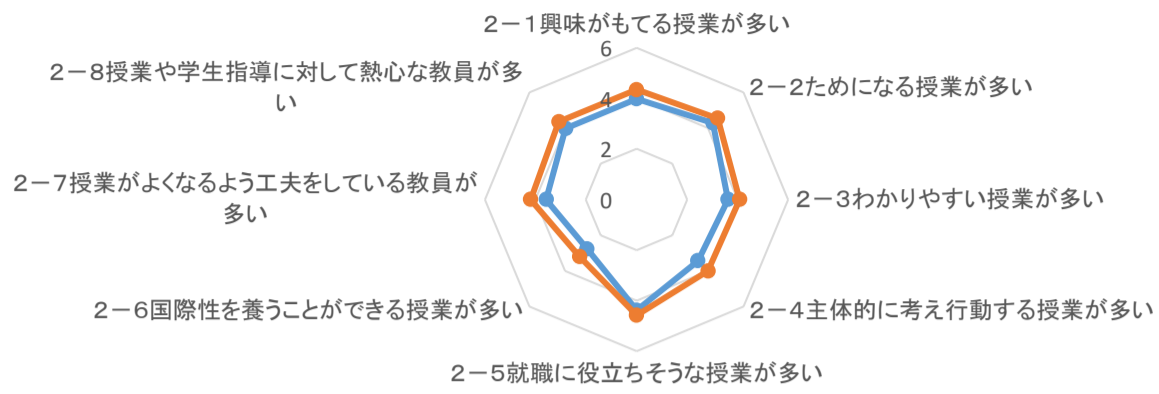
回答内容(点数)	3時間以上 5	2時間以上 3時間未満 4	1時間以上 2時間未満 3	30分以上 1時間未満 2	30分未満 1	回答者計	平均値
		5	6	9	2		

【6】あなたは、本学に入学して良かったと思いますか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

回答内容(点数)	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1	回答者計	平均値
		0	0	0	9		

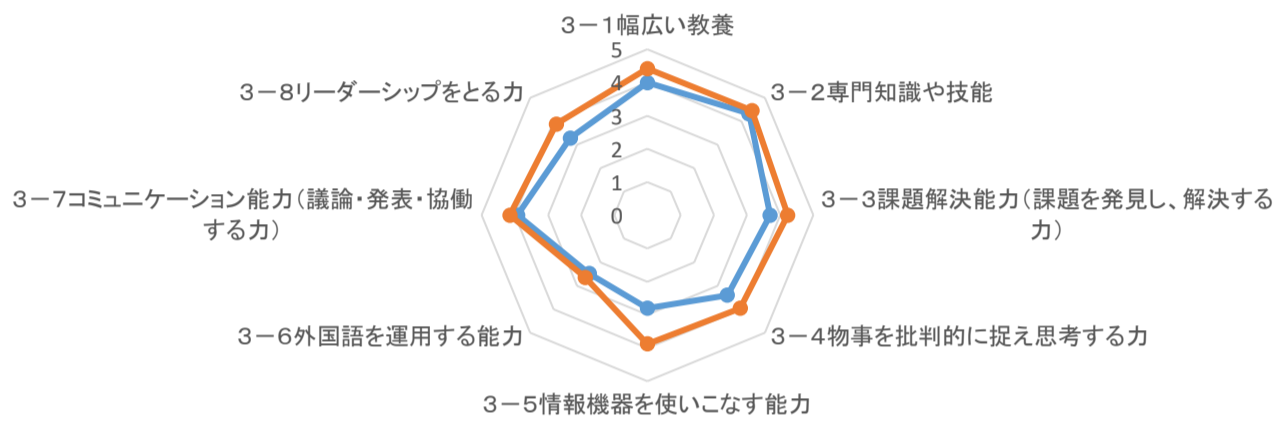
【2】授業について

● 全体平均 ● 大学平均



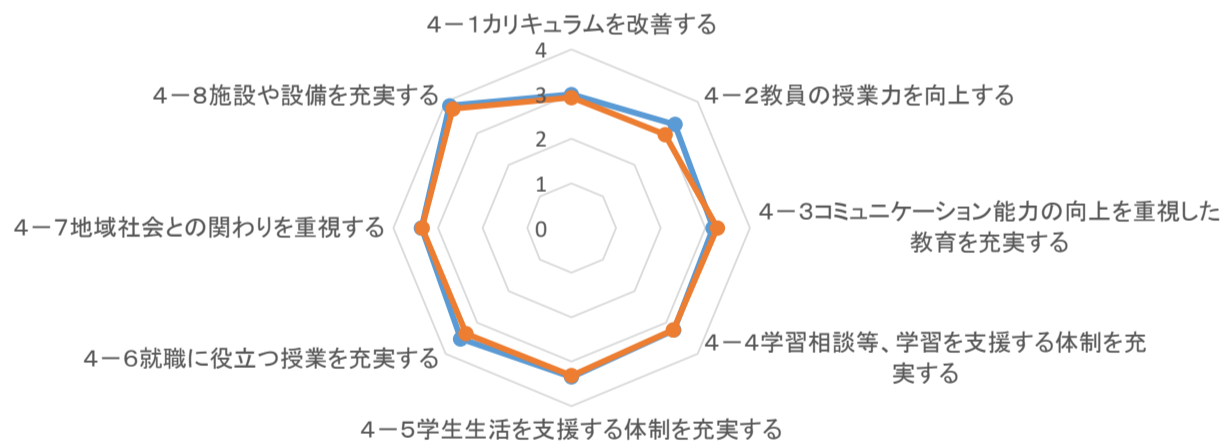
【3】授業を受けて身についた知識・能力について

● 全体平均 ● 大学平均



【4】改善に向けて取り組むべき事項について

● 平均 ● 大学平均



羽陽学園短期大学 授業改善アンケート集計結果(平成29年度前期)

授業科目名	履修者数	回答数	回答率	動機1	動機2	動機3	意欲平均	理解平均	向上平均	自発的平均	探求平均	熱意平均	教え方平均	コミュニケーション平均	勉強時間平均	板書平均	環境平均	オプション	総合平均
基礎教養入門	100	94	94.00	6	5	4	3.86	3.65	3.61	3.53	3.52	3.96	3.66	3.41	1.44	3.76	4.03	3.5	3.83
倫理学	9	9	100.00	1	1, 2	4, 5	4.22	4.22	4	3.78	3.67	4.33	3.78	4.33	1.44	3.78	4.5		4.11
文学	91	90	98.90	6	5	5	4.16	4.04	3.99	3.91	3.7	4.18	3.83	3.55	1.37	3.66	4.23	4	4.13
音楽基礎A	100	98	98.00	6	4	5	4.61	4.52	4.33	4.42	4.2	4.7	4.49	4.55	2.12	4.29	4.54	4.33	4.68
音楽基礎B	100	99	99.00	6	4	4	4.76	4.76	4.68	4.65	4.49	4.69	4.7	4.72	3.1	4.46	4.67	4.33	4.83
図画工作	100	99	99.00	6	5	4	4.68	4.68	4.51	4.5	4.35	4.52	4.64	4.61	1.58	4.49	4.55	4.71	4.76
幼児教育者論	100	96	96.00	6	5	4	4.44	4.15	4.23	4.16	3.52	4.89	4.56	4.01	1.52	4.5	4.68	5	4.72
教育原理	100	97	97.00	6	5	4	4.43	4.2	4.26	4.03	3.91	4.82	4.53	4.19	1.55	4.49	4.58	4.5	4.65
視聴覚教育論	100	98	98.00	6	5	4	4.33	4.2	3.99	3.83	3.72	4.11	3.9	3.82	1.55	3.91	4.08	3.75	4.16
教育実習指導	100	97	97.00	6	4	5	4.42	4.38	4.27	4.11	3.94	4.43	4.26	3.99	1.41	4.24	4.32	4.2	4.45
保育原理	100	98	98.00	6	5	4	4.4	4.19	4.19	4.03	3.93	4.49	4.34	4.08	1.65	4.3	4.4	3.5	4.54
社会福祉概論	100	98	98.00	6	5	4	4.2	4.08	3.99	3.84	3.73	4	3.92	3.77	1.56	4.05	4.22	4.4	4.26
社会的養護	100	100	100.00	6	5	4	4.16	3.93	3.97	3.91	3.9	4.32	3.97	3.93	1.64	3.88	4.18	4.57	4.24
子どもの食と栄養A	100	99	99.00	6	5	4	4.47	4.24	4.17	4.09	3.89	4.78	4.46	4.39	1.83	4.25	4.35	4.5	4.49
子どもの食と栄養B	50	47	94.00	6	5	4, 5	4.55	4.53	4.51	4.43	4.21	4.85	4.74	4.7	2.26	4.57	4.68		4.73
乳児保育	100	95	95.00	6	5	4	3.18	2.72	2.84	2.73	2.68	3	2.29	2.36	1.35	2.83	2.82	1	2.77
児童文化	100	99	99.00	6	4	4	4.32	4.29	4.31	4.11	3.74	4.25	4.02	3.79	1.8	3.76	4.02	4	4.24
子どもの生活と福祉	34	34	100.00	5	5	5	4.24	4.21	4.06	4.12	3.94	4.03	4.12	4.03	1.18	4.29	4.41		4.47
日本国憲法	107	101	94.39	6	5	4	3.95	3.47	3.66	3.61	3.51	4.08	3.43	3.53	1.83	3.53	4.08	3.88	3.76
こどもと音楽B	107	104	97.20	6	5	4	4.59	4.62	4.65	4.61	4.6	4.62	4.62	4.67	3.5	4.5	4.62	4.5	4.63
こどもと音楽C	101	87	86.14	6	5	4	4.45	4.29	4.41	4.33	4.25	4.47	4.41	4.43	2.08	4.29	4.48	4.58	4.46
国語表現法	19	19	100.00	1	5	4, 5	4.68	4.63	4.63	4.68	4.42	4.63	4.63	4.63	2.37	4.58	4.79	5	4.79
保育内容研究・健康	107	98	91.59	6	5	4	4.39	4.19	4.24	4.13	4.02	4.33	4.18	4.08	1.89	4.1	4.3	4.22	4.27
保育内容研究・人間関係	107	105	98.13	6	5	4	4.54	4.42	4.47	4.39	4.28	4.6	4.56	4.52	2.07	4.57	4.59	4.33	4.57
保育内容研究・言葉	107	98	91.59	6	5	4	4.36	4.28	4.28	4.18	4.06	4.43	4.27	4.3	1.93	4.23	4.41	4	4.37
保育内容研究・表現	107	100	93.46	6	5	4	4.24	4.18	4.25	4.13	4.05	4.24	4.04	4.31	2.01	3.97	3.94	4.1	4.15
子どもの生活と文化Ⅱ	29	27	93.10	1	4, 5	5	4.78	4.81	4.85	4.81	4.67	4.89	4.89	4.85	1.74	4.74	4.78	3	4.93
臨床心理学	107	96	89.72	6	5	4	3.72	3.55	3.57	3.27	3.27	3.79	3.08	3.16	1.64	3.26	3.63	4.1	3.27
相談援助	107	103	96.26	6	5	4	4.44	4.33	4.34	4.29	4.3	4.5	4.41	4.45	1.97	4.4	4.45	4.3	4.48
保育内容総論	107	102	95.33	6	5	4	4.37	4.37	4.38	4.38	4.33	4.43	4.41	4.49	2.35	4.43	4.47	4.47	4.44
社会的養護内容	107	92	85.98	6	5	4	4.41	4.34	4.33	4.42	4.26	4.35	4.36	4.33	2.23	4.31	4.35	4.07	4.45
保育実践研究Ⅲ	74	64	86.49	1	5	4	4.53	4.48	4.52	4.48	4.46	4.56	4.41	4.58	2.21	4.36	4.41	4.67	4.55
介護福祉総論Ⅱ	31	30	96.77	6	5	1	4.73	4.7	4.8	4.77	4.67	4.83	4.83	4.7	1.7	4.57	4.63	4	4.83
介護保険制度	28	28	100.00	6	5	4	4.25	4.18	4.21	4.14	4.07	4.36	4.25	4.21	2.75	4.25	4.32	4.5	4.32
介護の基本Ⅱ	28	28	100.00	6	5	4	4.25	4.21	4.32	4.21	4.25	4.32	4.32	4.19	2.57	4.29	4.29	4.33	4.46
介護の基本Ⅲ	28	27	96.43	6	5	4	4.19	4.3	4.22	4.19	4.15	4.41	4.31	4.38	2.22	4.26	4.33	3.67	4.35
コミュニケーション技術Ⅰ	28	27	96.43	6	5	4	4.07	4.07	4.11	3.96	3.81	4.41	4.19	4	2.07	4.19	4.15	4.5	4.22
生活支援技術Ⅰ	28	28	100.00	6	5	4	4.43	4.39	4.43	4.5	4.39	4.68	4.61	4.57	2.75	4.5	4.5	4.5	4.57
生活支援技術Ⅱ	28	28	100.00	6	5	4	3.93	3.57	3.68	3.39	3.39	4	3.43	3.46	1.93	3.61	3.75	3.67	3.59
生活支援技術Ⅲ	28	23	82.14	6	5	4	4.22	4.26	4.35	4.22	4.13	4.65	4.57	4.48	2.26	4.52	4.48	4.5	4.52
生活支援技術Ⅳ	28	26	92.86	6	5	4	4.38	4.15	4.31	4.15	3.96	4.77	4.58	4.5	2	4.54	4.62	5	4.73
介護過程Ⅰ	28	28	100.00	6	5	4	4.29	4.25	4.25	4.32	4.21	4.61	4.5	4.5	3.11	4.43	4.43	4.67	4.54
介護過程Ⅱ	28	28	100.00	6	5	4	4.46	4.43	4.46	4.43	4.36	4.57	4.5	4.54	3.18	4.46	4.5	4.5	4.5
介護総合演習Ⅰ	28	28	100.00	6	5	4	4.29	4.29	4.33	4.21	4.11	4.57	4.5	4.5	2.74	4.36	4.46	4.67	4.54
発達と老化の理解	28	28	100.00	6	5	4	4.46	4.36	4.46	4.5	4.43	4.64	4.54	4.43	2.93	4.46	4.43	4.5	4.57
こころとからだⅠ	28	28	100.00	6	5	4	4.5	4.39	4.39	4.5	4.43	4.64	4.57	4.61	3.14	4.54	4.5	4.5	4.64
社会福祉演習	28	28	100.00	6	5	4	4.32	4.25	4.21	4.29	4.11	4.36	4.21	4.29	2.93	4.43	4.36	4.5	4.39
医療的ケアⅠ	28	28	100.00	6	5	4	4.5	4.5	4.57	4.54	4.43	4.64	4.64	4.64	2.75	4.46	4.54	4.67	4.54

羽陽学園短期大学 授業改善アンケート集計結果(平成29年度後期)

授業科目名	履修者数	回答数	回答率	動機1	動機2	動機3	意欲平均	理解平均	向上平均	自発的平均	探求平均	熱意平均	教え方平均	コミュニケーション平均	勉強時間平均	板書平均	環境平均	オプション	総合平均
総合科目	51	43	84.31	6	5	4	3.91	3.74	3.69	3.72	3.7	4.02	3.76	3.6	1.56	3.71	4	3.5	3.88
経済学	16	15	93.75	6	5	1	4.07	3.93	3.67	3.67	3.67	4.2	3.87	3.67	1.21	3.79	4	3	4
英語コミュニケーション	99	90	90.91	6	5	4	4.17	4.02	3.82	3.69	3.61	4.11	3.72	4.11	1.46	3.8	4.08	3.8	3.97
体育実技	99	92	92.93	6	5	4	4.61	4.57	4.49	4.3	3.97	4.47	4.46	4.3	1.24	3.86	4.18	4.25	4.47
体育講義	99	94	94.95	6	5	4	4.18	4.14	4.06	3.91	3.88	4.26	4	3.91	1.38	4	4.09	4	4.08
こどもと音楽A	99	80	80.81	6	5	4	4.26	4.25	4.1	4.01	3.9	4.5	4.24	4.31	1.45	4.14	4.4	4.33	4.3
図画工作	99	92	92.93	6	5	4	4.49	4.48	4.44	4.41	4.24	4.45	4.54	4.52	1.47	4.31	4.49	4.29	4.6
指導法の研究	99	84	84.85	6	5	4	4.39	4.32	4.31	4.13	4.07	4.74	4.54	4.48	1.31	4.46	4.61	4	4.63
教育心理学	99	96	96.97	6	5	4	4.39	4.12	4.17	4	3.86	4.77	4.45	4.08	1.37	4.39	4.57	4	4.55
発達心理学	99	93	93.94	6	5	4	4.24	4	3.99	3.89	3.73	4.55	4.33	3.95	1.59	4.33	4.46	4.33	4.44
学級経営論	99	92	92.93	6	5	4	3.96	3.63	3.55	3.58	3.51	3.97	3.53	3.53	1.41	3.74	3.98	4	3.83
保育・教育課程論	99	94	94.95	6	5	4	4.15	4.06	3.87	3.82	3.69	3.98	3.73	3.74	1.39	3.79	4.12	3.6	3.89
保育内容研究(環境)	99	88	88.89	6	5	4	4.4	4.42	4.3	4.18	3.98	4.68	4.6	4.44	1.56	4.39	4.5	4.25	4.59
児童家庭福祉	99	97	97.98	6	5	4	4.04	3.91	3.87	3.84	3.8	4.29	3.95	3.95	1.31	3.98	4.17	3.5	4.13
子どもの保健Ⅰ	99	85	85.86	6	5	4	4.36	4.25	4.18	4.09	4.06	4.56	4.29	4.18	1.55	4.29	4.41	5	4.42
子どもの保健Ⅱ	99	84	84.85	6	5	4	3.02	2.75	2.81	2.6	2.53	2.79	2.37	2.35	1.24	2.85	2.44	1.4	2.62
子どもの食と栄養B	50	46	92.00	6	5	4	4.52	4.43	4.48	4.37	4.3	4.8	4.61	4.54	1.38	4.54	4.59		4.62
介護技術演習	22	22	100.00	1	5	5	4.59	4.73	4.73	4.55	4.45	4.68	4.68	4.77	1.55	4.18	4.64		4.81
介護福祉総論Ⅰ	32	29	90.62	6	5	4	4.69	4.59	4.45	4.48	4.24	4.52	4.45	4.38	1.31	4.45	4.66		4.59
保育実習指導Ⅰ	99	98	98.99	6	5	4	4.21	4.2	4.09	4.05	3.98	4.11	4.12	4.03	1.44	4.1	4.2	3.38	4.24
図画工作Ⅱ	31	30	96.77	1	4	5	4.63	4.7	4.73	4.63	4.6	4.5	4.57	4.67	1.73	4.47	4.53	4	4.77
体育	106	105	99.06	6	5	4	4.32	4.33	4.36	4.22	4.21	4.35	4.27	4.22	2.21	4.13	4.24	4	4.3
子どもの生活と文化Ⅰ	99	85	85.86	6	5	4	4.38	4.39	4.33	4.33	4.29	4.4	4.36	4.34	2.19	4.32	4.39	4.44	4.41
子どもの生活と文化Ⅲ	10	9	90.00	4	4	2	4.22	4.56	4.78	4.11	4	4.33	4	3.56	2.78	3.67	4.11		4.22
保育・教職実践演習(幼稚園)	106	101	95.28	6	5	4	4.32	4.31	4.37	4.26	4.26	4.38	4.34	4.32	2.17	4.31	4.37	4.2	4.41
保育実践研究Ⅰ	80	63	78.75	6	5	4	4.37	4.43	4.48	4.35	4.33	4.48	4.46	4.33	2.58	4.32	4.38	4.11	4.46
保育実践研究Ⅱ	32	31	96.88	5	4, 5	1, 4	4.39	4.55	4.55	4.48	4.45	4.52	4.52	4.48	2.48	4.48	4.55	4.5	4.58
情報処理演習	107	101	94.39	6	5	4	4.3	4.26	4.39	4.12	4.03	4.2	4.19	4.17	1.98	4.11	4.33	4	4.28
保育原理Ⅱ	23	21	91.30	6	5	4	4.29	4.14	4.19	4.19	4.1	4.38	4.19	4.24	1.48	4.3	4.29		4.29
子どもの保健Ⅲ	85	57	67.06	6	5	4	4.35	4.32	4.4	4.33	4.28	4.51	4.32	4.25	2.09	4.32	4.33	3.75	4.4
障害児保育	106	96	90.57	6	5	4	4.31	4.24	4.29	4.19	4.12	4.47	4.15	4.27	1.91	4.19	4.28	4.17	4.26
家庭支援論	107	94	87.85	6	5	4	4.36	4.38	4.35	4.36	4.32	4.38	4.39	4.37	2.33	4.38	4.41	4	4.45
保育相談支援	107	102	95.33	6	5	4	4.32	4.27	4.36	4.25	4.2	4.38	4.35	4.24	2.13	4.37	4.39	3.88	4.39
保育実習指導Ⅱ	106	83	78.30	6	5	4	4.28	4.33	4.39	4.25	4.2	4.42	4.2	4.1	1.94	4.17	4.19	3.82	4.28
保育実習指導Ⅲ	1	1	100.00	5	4	1	5	5	5	5	5	5	5	5	2	5	5		5
介護の基本Ⅰ	28	28	100.00	6	5	4	4.29	4.39	4.39	4.43	4.39	4.68	4.36	4.5	2.79	4.46	4.46	4.33	4.54
介護の基本Ⅳ	28	28	100.00	6	5	4	4.39	4.36	4.46	4.39	4.36	4.68	4.54	4.54	3.04	4.5	4.54	4	4.57
介護の基本Ⅴ	28	23	82.14	6	5	4	4.22	4.17	4.39	4.39	4.35	4.61	4.39	4.35	2.74	4.39	4.52	5	4.43
コミュニケーション技術Ⅱ	28	28	100.00	6	5	4	4.39	4.36	4.36	4.46	4.39	4.61	4.5	4.61	2.64	4.61	4.54	4.4	4.57
生活支援技術Ⅴ	28	28	100.00	6	5	4	4.46	4.46	4.43	4.54	4.43	4.64	4.57	4.54	3.07	4.57	4.64	3.8	4.57
生活支援技術Ⅵ	28	25	89.29	6	5	5	4.16	4.28	4.48	4.24	4.08	4.76	4.56	4.25	2.64	4.52	4.56	3	4.56
生活支援技術Ⅶ	28	28	100.00	6	5	4	4.57	4.54	4.64	4.54	4.54	4.75	4.5	4.5	2.31	4.43	4.61	3.5	4.64
介護過程Ⅲ	28	28	100.00	6	5	4	4.39	4.32	4.46	4.5	4.46	4.64	4.43	4.61	2.82	4.5	4.54	4.5	4.61
介護総合演習Ⅱ	28	28	100.00	6	5	4	4.36	4.36	4.36	4.39	4.32	4.64	4.5	4.5	2.75	4.5	4.46	4.5	4.5
認知症の理解	28	28	100.00	6	5	4	4.39	4.39	4.46	4.5	4.39	4.75	4.61	4.64	3.07	4.64	4.64	4.33	4.64
障害の理解	28	27	96.43	6	5	4	4.41	4.15	4.37	4.37	4.3	4.48	4.41	4.3	3.33	4.52	4.44	4	4.41
こころとからだⅡ	28	28	100.00	6	5	4	4.46	4.36	4.43	4.39	4.43	4.61	4.54	4.54	3.07	4.5	4.54	4.5	4.57
社会福祉演習	28	28	100.00	6	5	4	4.36	3.93	4.18	4.32	4.29	4.39	4.36	4.32	3.21	4.5	4.5	3.67	4.39
医療的ケアⅡ	28	28	100.00	6	5	4	4.57	4.57	4.57	4.57	4.61	4.68	4.68	4.64	2.54	4.64	4.64	4.5	4.71

羽陽学園短期大学FD・SD活動報告書
(平成29年度)
通巻11号

平成30年7月1日

編集 FD・SD推進委員会

渡邊 洋一

柏倉 弘和

松田 知明

太田 裕子

樋口 健介

伊藤 和雄

白崎 直季

今野 清

浦山 仁一

奥山 康夫

塚原 亜樹子

発行者 渡邊 洋一

発行所 羽陽学園短期大学 FD・SD推進委員会